

2-1. 佐原の町並みと山車行事に見る歴史的風致

(1) はじめに

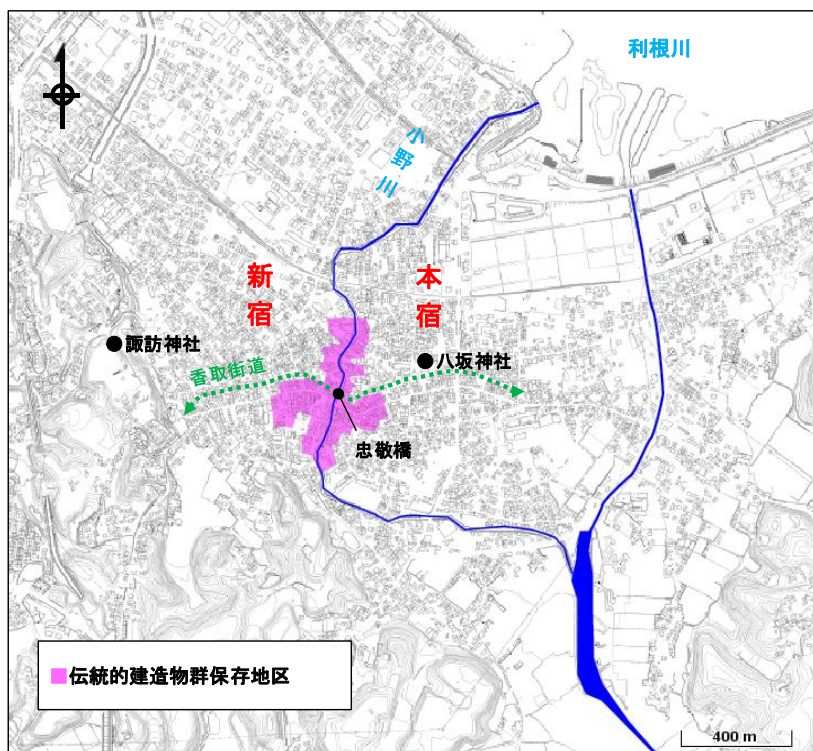
佐原は、香取市の中心市街地で、市域の北西部、利根川と小野川の河口部の自然堤防上に位置している。中世以来の歴史を有する町場であり、江戸時代には下総国香取郡佐原村であった。市街地を南北に流れる小野川（江戸時代の呼称は「大川」「佐原川」など）と、東西に走る通称香取街道（主要地方道佐原・山田線）が交差し、その周辺を中心に町並みが形成されてきた。佐原の町並みは、小野川を境にして、東側を本宿、西側を新宿と総称している。



小野川沿いの風景

江戸時代には醸造業が盛んとなり、「関東の灘」の異名をとるほど盛んであった。現在その数は減ったものの、2軒の酒蔵が営業を続け、佐原の酒造りの伝統を引き継いでいる。また、佐原の町並みは、江戸時代の利根川舟運の発達とともに、商家の町として栄え、香取街道沿いと小野川沿いに小売業や卸業の商店が軒を連ねてきた。

今も多くの商家が営業を続け、土蔵や店蔵造りの店舗など多くの建造物があり、その歴史的な景観を今に伝えている。平成8年(1996)には、それまでの住民による町並み保存運動と相まって、関東地方で初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定された。



佐原の中心市街地

その佐原の町並みで、本宿^{ぎ おんさい}祇園祭、新宿^{す わさい}諏訪祭の付け祭りとして行われる祭礼行事に「佐原の山車^{さわら だしぎょうじ}行事」がある。7月中旬に行われる祇園祭では10町内、10月中旬に行われる諏訪祭では15町内（現在1町内は休止中）の山車が曳き廻される。上部に大人形、周囲に豪華な彫刻を施すなど、各町内で意匠をこらした山車が、佐原囃子の調べにのせて、勇壮に、時には厳かに曳き廻される。

（２）佐原の町並みの成り立ち

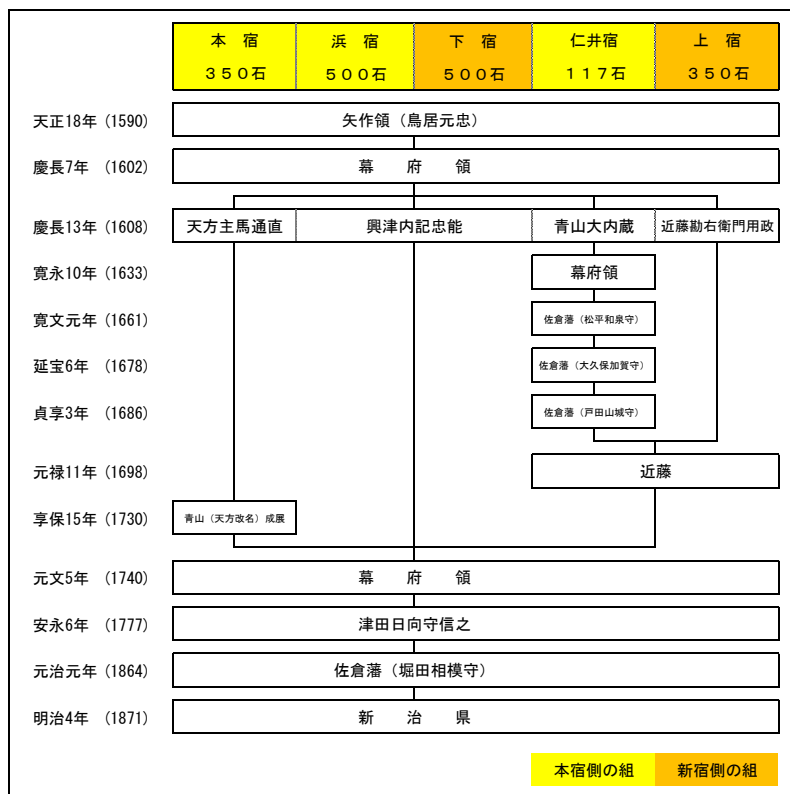
①はじめに

佐原は、市街地を南北に流れる小野川と、東西に走る通称香取街道（主要地方道佐原・山田線）が交差し、その周辺を中心に町並みが形成されてきた。交差する地点には忠^{ちゅうけい}敬橋^{いばし}が架かる。小野川は総延長5.8kmの一級河川で、市街地域では幅10メートル前後を持つ。江戸時代には船が町の奥深く入れるほどの水深があり、利根川^{しゅううん}舟運による町の発達に重要な役割を果たした。これにより江戸時代には佐原河岸ともよばれ、下利根随一の商業都市として発展した。江戸時代から利根川沿いの河岸場であり、商業の町として繁栄した佐原には、現在も江戸時代からの老舗商家の建物が残り、営業を続けている。

②佐原村の成り立ち

かつて利根川下流域には「香取の海^{かとり うみ}」と呼ばれる内海があり、佐原はその内海と小野川の間でできた砂洲上に集落が発展したと考えられている。佐原から4kmほど東には香取神宮が鎮座し、古代から中世にかけての佐原は、その社領の一つであった。

佐原の地名は、建保6年（1218）の香取神



近世支配変遷概略図

宮関係の史料に「在佐原村内御名田二段」とあるのが、史料上の初見とされる。また、応安7年(1374)の「^{かいふ ちゅうもん}海夫注文」(香取文書)という史料に、「さわらの津」とあることから、中世期に漁業や水上交通に従事する海夫が居住する津でもあったとされている。

天正18年(1590)に徳川家康の関東入国にともない、それまでの千葉氏一族の^{こくぶ}国分氏にかわり、家康の家臣鳥居元忠が^{とりい もとただ や はざりょう}矢作領4万石を領して当地方を支配することになる。慶長4年(1599)の^{や はざりょうけん ち}矢作領検地では、佐原村の村高は1,817石余であった。慶長7年(1602)の鳥居氏転封後、幕府領を経て、慶長13年(1608)からは旗本4氏の相^{あいきゅう}給支配となる。この際に佐原村は5組に分かれ、本宿では^{ほんじゅく}本宿組・^{に いじゅく}仁井宿組・^{はまじゅく}浜宿組、新宿では^{しもじゅく}下宿組・^{かみじゅく}上宿組となった。この他、佐原村新田は代官支配地となっている。その後、元文5年(1740)から一村幕府領、安永6年(1777)からは旗本津^{ひゅうがのかみ}田日向守領、元治元年(1864)からは佐倉藩領となり幕末期を迎える。

江戸時代を通じて1,800石を超える村高で、幕末には2,164石となっている。これに新田1,775石余(幕末期1,662石余)が加わる。江戸時代の村としては大村の部類に属する。

また、戸数・人口は、例えば、明和5年(1768)の新田を含めた人口は5,085人、天保9年(1838)になると、新田を含まずに、5,674人の人口を数える。

		佐原村	佐原村新田
慶長4年	1599	1,817石500	—
元禄15年頃	1702	1,830石6875	1,775石404
享保4年頃	1719	1,817石500	1,775石404
天保5年頃	1834	1,850石15879	1,976石982
弘化2年	1845	2,164石689	1,662石452
明治初年	1868	2,164石689	1,662石452

村高変遷表

	本宿		浜宿		仁井宿		上宿		下宿		新田		総計	
	家数(軒)	人数(人)	家数(軒)	人数(人)	家数(軒)	人数(人)	家数(軒)	人数(人)	家数(軒)	人数(人)	家数(軒)	人数(人)	家数(軒)	人数(人)
元文5年 1740													958	3,819
														男2,057
														女1,762
明和2年 1765	185		327		39		204		398		122		1,275	4,855
														男2,655
														女2,200
明和5年 1768	202	742	325	1,309	46	181	222	755	399	1,444	128	654	1,322	5,085
		男403		男702		男93		男392		男812		男356		男2,758
		女339		女607		女88		女363		女632		女298		女2,327
明和6年 1769	202	744	322	1,287	51	197	221	749	405	1,409	127	643	1,328	5,029
		男401		男687		男105		男387		男802		男343		男2,725
		女343		女600		女92		女362		女607		女300		女2,304
天保9年 1838	263	1,357	330	1,655	41	175	123	579	400	1,881			1,163	5,647
		男650		男811		男87		男288		男980				男2,816
		女707		女844		女88		女291		女901				女2,831
弘化2年 1845													1,140	
本宿側の組							新宿側の組					新田		

組別家数・人数表

明治以降は、明治8年(1875)に千葉県に属し、同年隣村の岩ヶ崎村^{いわがさき}を合併、明治22年(1889)に近隣との合併により佐原町となった。明治24年(1891)の佐原町の戸数は2,044戸、人口は11,834人であった。

③佐原の町並み

佐原は小野川を境にして、東側を本宿、西側を新宿と総称し、それぞれ十数町の町内に分かれている。元々香取神宮社領として本宿が発展し、その後に新宿が開かれた。その新宿の発祥については、天正8年(1580)に当時の領主であった千葉氏一族の国分氏が、新宿側に市を立てることを許可したことに始まるともいわれる(伊能三郎右衛門家文書、正徳4年〈1714〉「部冊帳 前巻」)。

新宿側の市については、六斎市として3と8のつく日に市が立ち、上宿では3日、18日、中宿では8日、23日、下宿では13日、28日、に定期市が開かれた。新宿の街道の路傍に「市守社」^{いちもりしや}が祀られていた(現在は諏訪神社境内に移動)。

本宿側では、嘉慶2年(1388)の香取神宮関係史料に、「佐原八日市場牛頭天王ノ東北ノツラ」「二日市場内さ近入道」といった地名があり、牛頭天王^{ごずてんのう}(現、本宿鎮守八坂神社)の近くでは八日市場・二日市場といった2と8が付く日に市が開かれていたことをうかがわせる。

佐原は利根川舟運により、江戸につながり、そのことが経済的な繁栄の一つの要因となっていた。佐原河岸とも称され、小野川の両岸は「だし」と呼ばれる船着場が数多く設置されていた。安政3年(1856)の赤松宗旦^{あかまつそうたん}著『利根川図志』には「佐原ハ下利根附第一繁昌の地なり、村の中程に川有て新宿・本宿の間に橋を架す、大橋と云、米穀・諸荷物の揚さげ、旅人の船、川口より此所まで先をあらそひ、兩岸の狭きをうらミ、誠に水陸往来の群衆昼夜止時なし」と記されるような繁栄ぶりであった。

佐原の町並みは、中心部を南北に流れる小野川沿いと、これに交差するように東西に走る香取街道沿いに商家が軒を連ねている。

佐原の町は近世期から幾度となく大火に見



香取街道 本宿(昭和初期)



香取街道 新宿(昭和初期)

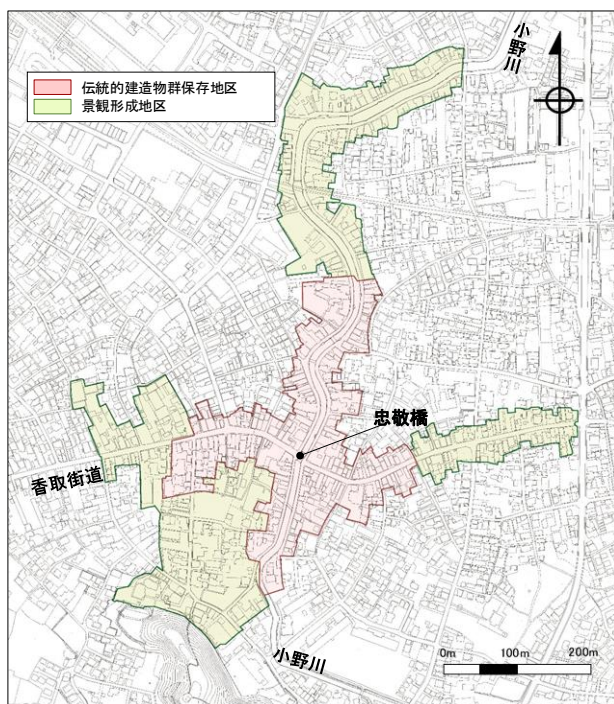
舞われてきた。特に明治 25 年（1892）12 月に発生した火災では、^{かなえばし}協橋（現忠敬橋）を中心とした付近で、1,200 棟の家屋が焼失した。このため、佐原の建物の多くは、防火を意識して造られた土蔵造りや厚塗り壁の建築が多く見られるが、これが佐原の町並みの特徴の一つと言える。なお、佐原の町並みは、江戸時代から昭和期前半の町屋を主体としているが、小野川沿いと香取街道沿いでは、場所の特性や生業の違いにより、その町屋の特徴も異なっている。

【小野川沿い】江戸時代に利根川沿いの河岸場であった佐原は、周辺や近隣から物資を集め江戸へ運び、江戸から呉服や砂糖・塩等の日常品を運び近隣に売り捌く商業都市として栄えた。その中心を流れる小野川沿いには米問屋や醸造業を営む店が増えた。

川沿いの建築物は、比較的大規模で寄棟平入りの平屋・2 階建てのものが多い。切妻平入り 2 階建ても若干みられるが、いずれも道路側へ瓦屋根を葺き降ろしている。屋敷地は、大小様々であるが、生業の違いによるものか、香取街道沿いよりも広い。

【香取街道沿い】香取街道は、新宿と本宿の間を通過する重要な道路である。道路沿いの建築物は、比較的小規模で切妻平入り、2 階建てが多い。1 階は半間^{げや}の下屋庇を設け、軒先や棟が連続し、調和のとれた町並みを形成する。屋敷は、間口が狭く（3 間程度が多い）奥行きのある形状を呈する。生業の種別は日常品を扱う店が多く、小売りと卸商を営む商家が多い。

昭和 5 年（1930）の松井天山「千葉県佐原町^{ちようかんず}鳥瞰図」に当時の町並みの様子が詳しく描かれている。これを見ると、中央部を流れる小野川と、交差するように走る香取街道を中心として、外側に向かって町並みが形成されていることが分かる。



佐原の町並みの中心市街地



松井天山「千葉県佐原町鳥瞰圖」（昭和5年、成田山仏教図書館所蔵、一部加筆）

④町並みの保存

市では佐原の小野川沿いと香取街道沿いを中心とする範囲（18.6ha）を景観形成地区に指定し、このうち「伝統的建造物群及びこれと一体をなしてその価値を形成している環境を保存する必要がある地区」（7.1ha）を香取市佐原伝統的建造物群保存地区に指定しているが、同地区は平成 8 年（1996）に関東地方で初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定された。



佐原の町並みの中心市街地

その選定に至る過程においては、住民による町並みの保存活動も行われてきた。昭和 40 年代後半ころから、町並み保存について官民協働で検討が始められ、昭和 48 年（1973）には文化庁補助事業の伝統的建造物群保存対策事業による町並み調査が、昭和 57 年（1982）には、財団法人観光資源保護団体（現公益財団法人日本ナショナルトラスト）による町並み調査も行われた。平成 3 年（1991）には「佐原の町並みを考える会」（現 NPO 法人小野川と佐原の町並みを考える会）も発足した。この会が町並み保存に大きく寄与しており、町並みの広報活動、三菱館（県指定文化財・三菱銀行佐原支店旧本館）や隣接する交流館での観光案内、小野川の美化運動など、地道な活動を続けてきている。特に、平成 23 年（2011）3 月の東日本大震災では、地区内の多くの伝統的建造物に被害が発生したが、その際にもいち早く考える会は独自にその被害状況の調査をし、また建物修理費用に関する民間助成の取りまとめをするなど、復興に尽力している。

なお、現在の小野川の沿岸には、歴史的景観を形成するものとして、建物の他にも「だし」（石段状の船着き場）が残る場所もあり、往時の面影を今に残している。また、忠敬橋ちゅうけいばしや樋橋とよはし（通称「じゃあじゃあ橋」）などもある。

(3) 佐原の町並みを形成する商家と酒造蔵

①商家の町・佐原の形成（小売・卸業）

佐原の町並みは、先に述べたように、小野川を境にして、東側を本宿、西側を新宿と総称している。新宿側では、天正 8 年（1580）に当時の領主から許可され、定期市が開かれるようになった（「部冊帳 前巻」）。一方本宿側では、中世期に「八日市場」「二日市場」などの地名が見えることから、市場が形成されたことがうかがわれる。このような商業の発達のもと、利根川を通じた舟運が発展し、小野川の両岸には「だし」（石段状の船着き場）が多く設置されるようになる。小野川と香取街道沿いには多くの商家が軒を連ねるようになった。そして、これらの範囲を中心として、江戸時代から明治期には、佐原は商業的な発展を遂げてきた。

これらの商家の中には、消滅したものもあるが、時代の変遷の中で紆余曲折を経ながら、現在も営業を続けている商家も多く、古くからの土蔵や壁を厚くした店蔵造りの店舗が随所に残されている。

②佐原の酒造りの歴史（醸造業）

佐原の酒造りは、江戸時代の中頃には「関東の灘^{なだ}」の異名をとるほど盛んであった。その要因は、江戸時代前期の新田開発により成立した広大な水田と、水郷地帯と呼ぶほど豊富な水に恵まれていたこと、一大消費地である江戸との物資の往来が盛んとなったことなどが考えられている。『佐原市史』によると、その酒造りは、寛文年間（1661～1672）に伊能三郎右衛門家が、常陸国牛堀村平八郎の酒屋名代（酒造米高 70 石、代金 10 両）を買いうけて酒屋を始めたと言われている。伊能三郎右衛門家は江戸時代に初めて実測による日本地図を作製した

酒造人		酒造高	改酒造高
		(石)	(石斗)
1	久 左 衛 門	900	300.0
2	源 右 衛 門	360	120.0
3	善 右 衛 門	400	133.3
4	利 兵 衛	160	53.3
5	久 七	600	200.0
6	仁 兵 衛	700	233.3
7	仙 右 衛 門	500	166.2
8	永沢治郎右衛門	1,675	558.3
9	伊能三郎右衛門	1,480	493.3
10	紋 左 衛 門	600	200.0
11	仁 兵 衛	600	200.0
12	太 兵 衛	300	100.0
13	利 兵 衛	250	83.3
14	太 兵 衛	250	83.3
15	半 七	360	120.0
16	三 之 丞	600	200.0
17	甚 平	250	83.3
18	兵 右 衛 門	250	83.3
19	治 右 衛 門	370	123.3
20	源 左 衛 門	360	12.0
21	重 兵 衛	190	63.3
22	清 兵 衛	200	66.6
23	平 八	250	83.3
24	半 重 郎	150	50.0
25	卯 兵 衛	250	83.3
26	伊 兵 衛	150	50.0
27	武 兵 衛	150	50.0
28	伝 右 衛 門	90	30.0
29	治 兵 衛	150	50.0
30	忠 助	250	83.3
31	与 左 衛 門	150	50.0
32	甚 四 郎	180	60.0
33	伝 七	90	30.0
34	新 兵 衛	250	83.3
35	四 郎 兵 衛	140	46.6
		13,605	4,533.9

天明 8 年 7 月 佐原村の酒造人

い のうただたか
伊能忠敬を輩出した佐原を代表する家柄である。

天明 8 年（1788）の佐原村の酒造人は 35 人を数え、酒造米高は 13,605 石であった。このうち、永沢家^{ながさわ}が 1,675 石、伊能家は 1,480 石で上位 2 人を占め、当時の佐原の酒造りの中心的存在であった。

その後、天保 14 年（1843）の株仲間 27 人には伊能、永沢両家の名前は消え、新興の酒造人による新旧の交代が進んだものと思われる。

明治期以降の佐原の醸造を見てみると、江戸時代の醸造は清酒が中心であったが、明治 44 年（1911）の醸造物の佐原町から町外への輸出（移出）高は、醤油が 175,000 円、清酒が 67,500 円、味噌が 16,500 円となっていて、醤油の輸出高が清酒をはるかに凌いでいる（明治 45 年度「農商務統計表」より）。

最盛期は 35 人を数えた酒造人のほとんどがなくなってしまったが、現在でも、馬場酒造と東薫酒造^{とうくん}の 2 軒の酒蔵が酒造りを続けている。また、醤油醸造^{しょうじょう}については本格的に醸造を行うところはなく、正上醤油店が佃煮製造・販売業として業態を変えて残っている。

ところで、馬場・東薫の両酒蔵の正面には杉玉が吊り下げられている。杉玉とは杉の葉（穂先）を球状に束ねたもので、酒林とも呼ばれる。新酒が出来たことを知らせるもので、酒蔵の軒先などに吊るされる。初めは青々とした杉玉の色が、時期が経つほどに茶色に変色していくが、それは熟成の度合いが進んだことを表わしている、と言われている。



杉玉（東薫酒造）



杉玉（馬場酒造）

③佐原の町並みに関連する建造物

ア) 今も営みが続く商家

◆^{こぼり}小堀屋本店（蕎麦屋） <県指定文化財>

年代：明治 33 年（1900）

規模・特徴：桁行 2 間、梁間 3 間半、切妻造平入 2 階建、棧瓦葺

店舗は明治 25 年（1892）の大火で焼失し、その後仮普請の店を設けたが、明治 32 年（1899）に火災で焼失し、翌年再建された。

小堀屋は、忠敬橋からほど近く、香取街道の新宿側に位置している。江戸時代から当地で代々続く蕎麦屋である。元々醤油醸造業を家業としていたが、火事をきっかけに天明 2 年（1782）に蕎麦屋を創業したと当家では伝えている。小堀屋には、蕎麦の献立と製法を記した「秘伝書」（享和 3 年〈1803〉定、弘化 5 年〈1848〉写）が残されている。現在の当主で 8 代目となる。黒切蕎麦が有名で、昆布を加工した黒色の蕎麦を提供している。



小堀屋本店



小堀屋本店（昭和初期）

◆^{ふくしん}福新呉服店 <県指定文化財>

（店舗）年代：明治 27～28 年（1894～95）

規模・特徴：間口 4 間、奥行 8 間、切妻造平入、正面側 3 間半が 2 階建、背面側平屋建、棧瓦葺

（土蔵）年代：明治初期

規模・特徴：桁行 4 間、梁間 3 間半、切妻造平入 2 階建、棧瓦葺

店舗は明治 25 年（1892）の大火で焼失し、その後、明治 27～28 年にかけて再建されたものである。

福新呉服店は、忠敬橋



福新呉服店

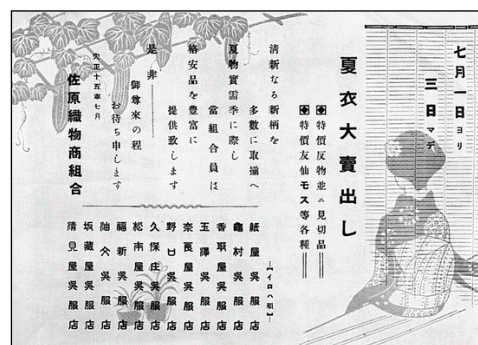


福新呉服店（昭和初期）

からほど近く、香取街道の新宿側に位置している。文化元年（1804）創業と伝わる商家である。当家は小見川の出身で、佐原へ移り現在地で店舗を構えた。初めは質物や古着を扱っていた。代々福島屋新兵衛を屋号としていたことから「福新」と呼ばれる。呉服商を営むようになったのは明治20年代からである。大正14年（1925）1月『東京信用交換所内報』第3903号によると、取扱品は「綿布六分、絹布二分、洋反物二分」で、主として東京から仕入れ、地元付近を販路、経営状態は「近時相当成績を収め居りて」と評価されている。かつては、毎年11月にえびす講売出しを行うことが恒例だったようである。大正15年（1926）のチラシ広告で、当時、福新呉服店など12件の呉服商により佐原織物商組合が組織されていた。



えびす講チラシ(大正14年11月)



佐原織物商組合売出チラシ(大正15年7月)

現在の福新呉服店は、藍染の手拭いや風呂敷を始めとして、和装小物や和風雑貨などを店内に陳列している。

また、地元商店で組織する「佐原おかみさん会」では、古くからの店舗を「佐原まちぐるみ博物館」と称して公開等している。中でも福新呉服店は積極的に取り組んでいて、土蔵に保管されていた古道具や雛人形、着物などを店内に展示し、店舗奥に続く中庭も公開するなど、訪れた観光客を楽しませている。



店内陳列の様子



古道具等の展示風景

◆中村屋商店 <県指定文化財>

(店舗) 年代：江戸末から明治初期

規模・特徴：間口約3間、奥行約5間半、切妻造変形・正面寄棟造・背面切妻造2階建、棧瓦葺

(土蔵) 年代：明治25年(1892)頃再建

規模・特徴：桁行4間半、梁間3間、切妻造平入3階建、棧瓦葺



中村屋商店



中村屋商店(大正期)

香取街道と小野川が交差する角に位置していることから、地元では「角店」^{かどみせ}とも呼ばれている。明治初期頃に塩屋の跡を中村屋乾物店の当主が買い取り、分家した店である。代々^{たたみおもて}畳表や荒物、雑貨などを商ってきた。大正3年(1914)『佐原案内』掲載広告によれば、当時は畳表^{あさお}、麻苧(糸)、傘、荒物類を取り扱うほか、官藍の元売捌も行っていたようである。

近年は、土蔵で和風小物、雑貨などの販売を行うかたわら、店舗を改装しカフェとして活用している。



『佐原案内』(大正3年)掲載広告より

◆中村屋乾物店 <県指定文化財>

(店舗) 年代：明治25年(1892)頃再建

規模・特徴：桁行3間、梁間3間、切妻造平入2階建、棧瓦葺、土蔵造

(文庫蔵) 年代：1階、2階は明治18年(1885)建築、3階は店舗とともに明治25年(1892)頃に大火前の形に再建

規模・特徴：桁行3間、梁間3間、寄棟造、3階建、棧瓦葺



中村屋乾物店

規模・特徴：桁行3間、梁間3間、寄棟造、3階建、棧瓦葺

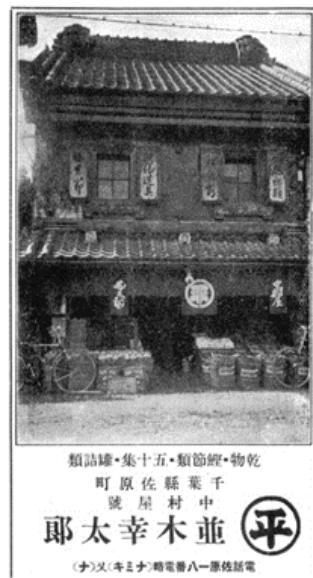
中村屋乾物店は、忠敬橋からほど近く、本宿側の香取街道沿いに面した、江戸時代創業の乾物屋である。中村屋の屋号は、香取郡多古町中村の出身であることに因んでいる。

大正3年(1914)『佐原案内』掲載広告によれば、当時は乾物、鰹節類、五十集(海産物加工品か)、缶詰類を取り扱っていたようである。店舗2階の観音開きの土戸には、「諸国乾物類」「松魚節」「勝男節」「祝儀道具」の看板が見える。

現在でも、卸しが中心ではあるが昔ながらの乾物を取扱っており、店頭でも鰹節や昆布、豆類などを並べて販売している。



店内陳列の様子



『佐原案内』(大正3年)掲載広告より

◆ 正上醤油店 <県指定文化財>

(店舗) 年代：天保3年(1832)

規模・特徴：桁行4間、梁間3間半、切妻造平入2階建、棧瓦葺

(土蔵) 年代：明治初期

規模・特徴：桁行3間、梁間2間半、寄棟造妻入2階建、棧瓦葺

寛政12年(1800)創業、天保3年(1832)からは醤油醸造業、戦後は佃煮の製造販売を営む。忠敬橋から100mほどの、本宿側の小野川沿いの商家で、店舗と土蔵は建築当初の姿を残す。

明治29年(1896)の『大日本博覧図』には、「加瀬庄次郎」宅として小野川沿いで広大な敷地を有する当時の正上醤油店が描かれている。図中には川に面して今も残る店舗と土蔵が見える。また、3つ描かれた石段状のだしのうち、中央の一つが現在も残っている。これは当家の人が、護岸整備などで次々とだしが撤去されることで佐原らしさが失われることを憂いて、残したと言われる。大正15年(1926)4月調の醸造高は3,270石で、その価格は124,260円であった(『佐原町誌』)。



正上醤油店



正上醤油店（昭和初期）



加瀬主次郎宅（『大日本博覧図 第11編』精行社・明治29年、常総市所蔵、一部加筆）

昭和30年代頃からは、「いかだ焼き」と称する串に刺した川魚の佃煮や焼き蛤などのお土産品の製造、販売が中心である。また、店舗では「トンボ玉」（ガラス玉）によるアクセサリー作り体験や販売も行っていて、観光客で賑わう商店の一つとなっている。



正上のいかだ焼き・焼き蛤

イ) 酒造りの伝統を伝える醸造蔵

◆馬場酒造

馬場酒造は、佐原の新宿側の香取街道沿いに面したところに所在している。代々善兵衛を名乗っていた。天和年間（1681～1683）に初代が^{やまと}大和国（奈良県）^{かつげ}葛下郡馬場村から出て、佐原で^{こうじ}糴屋を開いたことに始まり、5代目の天保13年（1842）に酒造りを始めている。江戸後期には味醂、明治期には醤油醸造も始めたとも言われる。



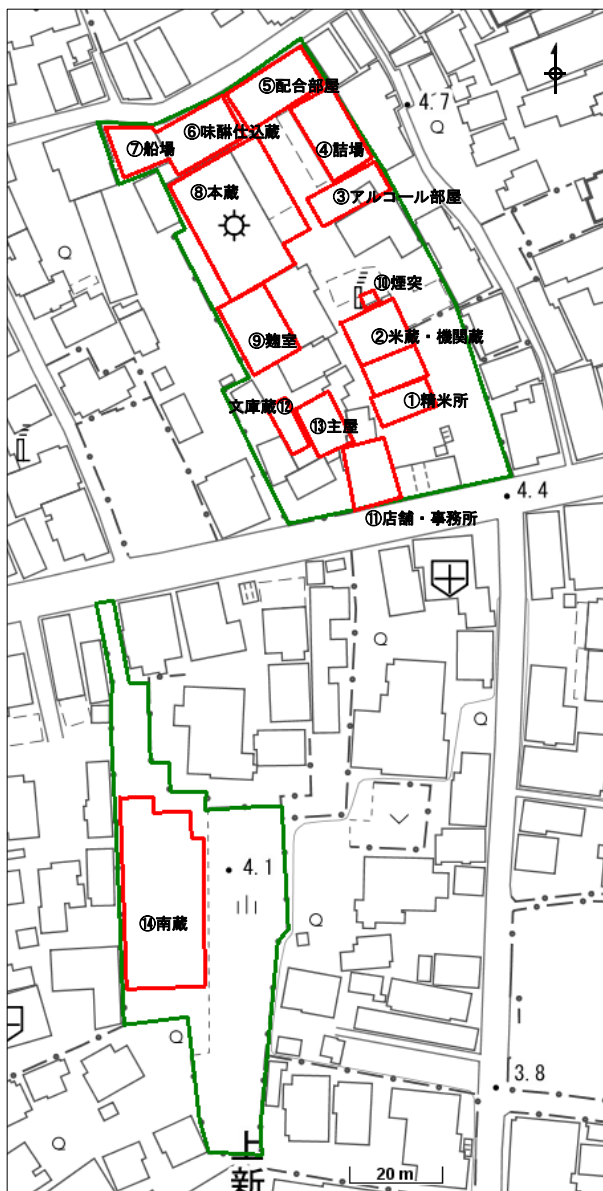
馬場酒造 店舗正面

大正3年（1914）『佐原案内』掲載広告によれば、「味醂、白味醂、銘酒、最上醤油」と幅広く取り扱っていたようである。大正15年（1926）4月調では、味醂の醸造高1,056石、その価格は116,160円、清酒の醸造高488石、価格は116,160円、焼酎の醸造高13石、価格は116,160円となっている（『佐原町誌』）。



『佐原案内』（大正3年）掲載広告より

現在は、清酒・焼酎・味醂を製造販売している。清酒「清正」「雪山」、味醂では「^{さいじょうしろ みりん}最上白味醂」などの銘柄で知られる。なお、当家にはある時期^{かつかいしゅう}勝海舟も逗留したとも伝わり、そのことに因んだ「^{ちな}海舟散人」といった銘柄も販売されている。



馬場酒造 建物配置図



①精米所



②米蔵・機関蔵・甑



⑩煙突



香取街道から見える馬場酒造の煙突（昭和初期）

	種別	呼称	構造等	摘要
①	倉	精米所	木造、瓦葺	明治期建築
②	倉	米蔵・機関蔵	木造、瓦葺、平屋建	慶応2年（1866）建築
③	倉	アルコール部屋	木造、瓦葺、平屋建	天保年間建築
④	倉	詰場	木造、鉄板葺、平屋建	昭和初期建築
⑤	倉	配合部屋	木造、鉄板葺、平屋建	昭和初期建築
⑥	倉	味噌仕込蔵	木造、鉄板葺	明治期建築
⑦	倉	船場	木造、鉄板葺	明治期建築
⑧	倉	本蔵	木造、瓦葺	天保年間建築
⑨	倉	麹室	土蔵、瓦葺、二階建	明治期建築
⑩	煙突	煙突	煉瓦造	明治31年（1898）建築
⑪	店舗・事務所	店舗・事務所	木造、瓦葺、二階建	※昭和25年（1950）以前の建築
⑫	倉	文庫蔵	土蔵、瓦葺、二階建	※昭和25年（1950）以前の建築
⑬	主屋	主屋	木造、瓦葺、平屋建	※昭和25年（1950）以前の建築
⑭	倉	南蔵	木造、鉄板葺、平屋建	※昭和25年（1950）以前の建築
※印は登記情報等				

馬場酒造 建物一覧

馬場酒造の敷地内には、香取街道に面して店舗、事務所があり、その奥に連なるように別表のような建物が配置されている。江戸期から明治期にかけての建築物が多いが、年代が明確なものとしては、米蔵・機関蔵が慶応2年（1866）の建築である。本市の景観形成指定物件ともなっているが、平成23年（2011）3月の東日本大震災で屋根等の破損があったこともあり、その後修理を実施している。その先に見える煙突は高さが13mほどあるもので、明治31年（1898）の建築である。

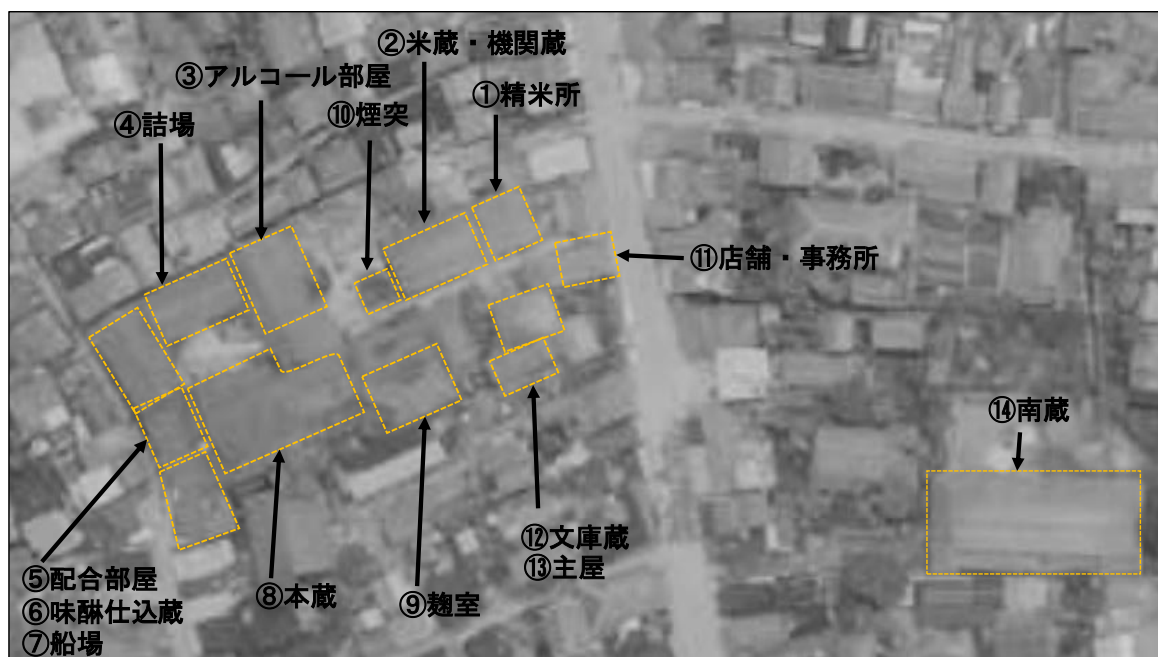
敷地内には現在使用していない物置などを活用して、かつて醸造などで使用した道具や樽の焼印用の鋺^{こて}などが展示されている。甑^{こしき}と呼ばれる蒸し器の上に載せる丸型の蒸籠^{せいろ}型焼酎蒸留器もあるが、これは大正から昭和の初めまで使用されていたものである。酒蔵などは奥にあるが手前にある物置や倉庫などについては、見学が可能となっている。



展示されている醸造用具



展示されている醸造用具



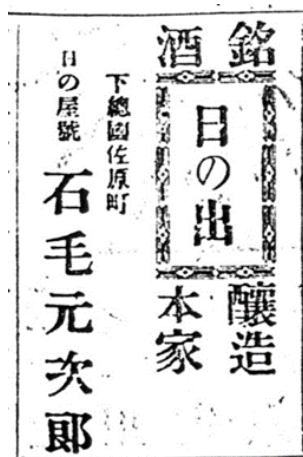
馬場酒造の建物配置（昭和37年〈1962〉「空中写真」、国土地理院の許可を得て使用）

◆^{とうくん}東薫酒造

東薫酒造は、馬場酒造から西に100mほど離れた、同じく新宿側の香取街道沿いに面したところに所在している。東薫酒造は、文政8年（1825）創業の酒蔵。創業者の石毛^{うへえ}卯兵衛が、伊能忠敬を輩出した伊能三郎右衛門の蔵で酒造りを学び、その後権利を得て創業した。

明治40年代に当地で発行されていた地方新聞『実業新報』（明治43年〈1910〉2月1日号）の掲載広告によると、当時は日の屋を号していて、「日の出」といった清酒を醸造していたようである。大正15年（1926）4月調では、清酒の醸造高は、488石、その価格は116,160円、焼酎は30石、価格は3,300円となっている（『佐原町誌』）。

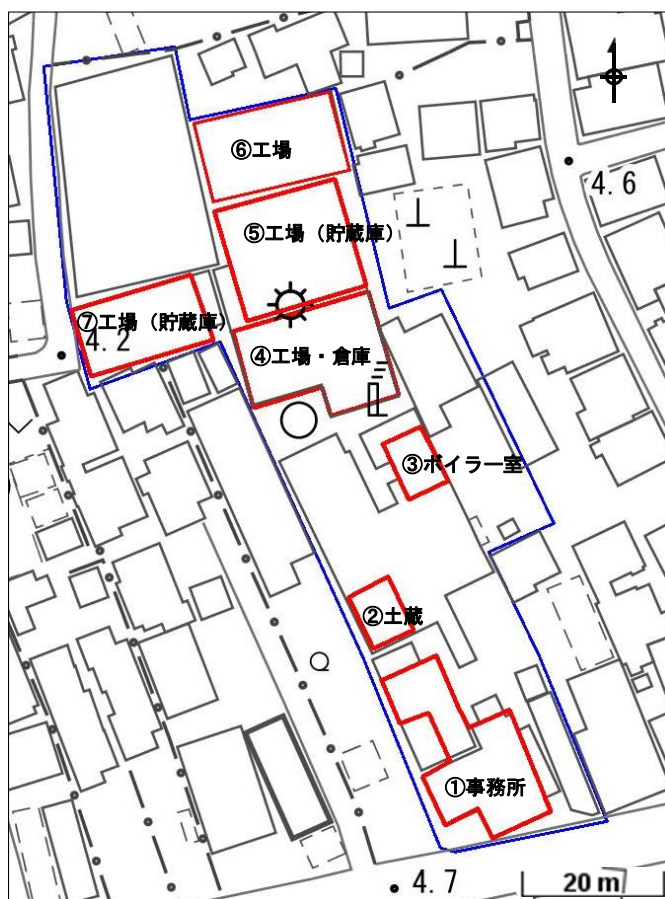
現在は、「東薫」や「^{ふたりしずか}二人静」といった銘柄で地元では知られるが、他に創業者の名を冠した「卯兵衛」や「^{かのう}叶」といった銘柄もある。



『実業新報』（明治43年）掲載広告より



東薫酒造 店舗正面



東薫酒造 建物配置図

馬場酒造と同様に、東薫の敷地は、香取街道に面して店舗と事務所があり、そこから中庭的な通路を通して奥に向かって別表のような建物が並んでいる。

東薫酒造では、岩手県の杜氏による酒造りをしている。厳冬期には弟子を伴った杜氏により朝早くから仕込みが行われ、洗米・蒸米作業・麴づくり・もろみ仕込み・搾りなどの様々な過程を経て、清酒が造られていく。

支障のない範囲での見学を受け入れや、団体客用のバス駐車場も整備されていて、積極的な取り組みをしている酒蔵である。



②土蔵



⑥工場



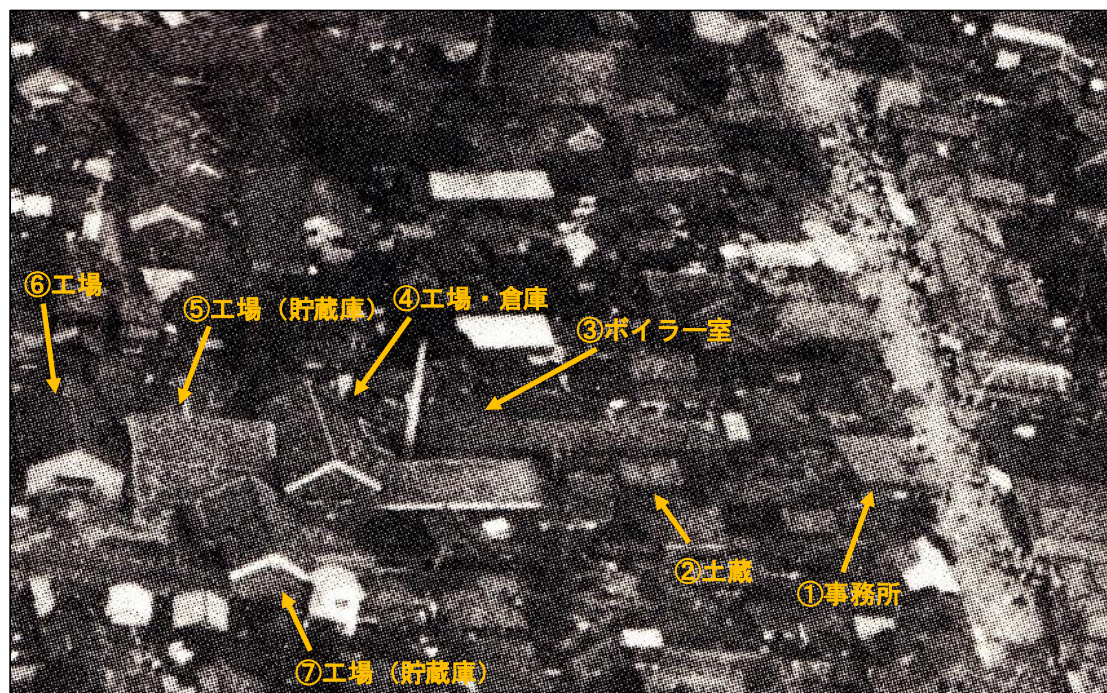
⑦工場（貯蔵庫）



東薫酒造 敷地内風景

	種別	呼称	構造等	摘要
①	事務所	事務所	木造、瓦・鉄板交葺・二階建	昭和28年（1953）以前の建築
②	倉	土蔵	木造、瓦葺、二階建	昭和43年（1968）以前の建築
③	倉	ボイラー室	木造、鉄板葺、平屋建	昭和43年（1968）以前の建築
④	倉	工場・倉庫	木造、瓦葺、二階建	昭和43年（1968）以前の建築
⑤	倉	工場（貯蔵庫）	木造、瓦葺、平屋建	昭和43年（1968）以前の建築
⑥	倉	工場	木造、鉄板葺、平屋建	昭和43年（1968）以前の建築
⑦	倉	工場（貯蔵庫）	木造、瓦葺、平屋建	昭和43年（1968）以前の建築
※摘要欄は登記情報等				

東薫酒造 建物一覧



東薫酒造の建物配置（昭和 30 年〈1955〉『佐原市鳥瞰図』より、一部加筆）

ウ) 往時の姿を今に伝える建造物

◆ 正文堂書店 <県指定文化財>

年代：明治 13 年（1880）、棟札が残る

規模・特徴：桁行 3 間、梁間 3 間半、切妻造平入 2 階建、本瓦葺、土蔵造

江戸時代から現在の場所で書籍の販売や出版を行ってきたと言われる。



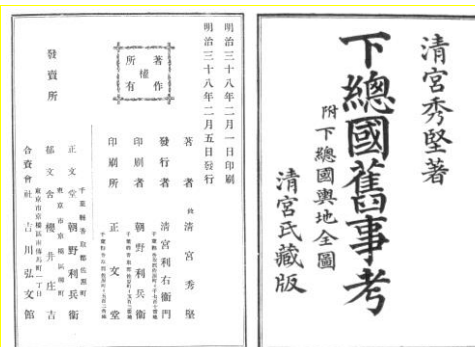
正文堂書店

明治期には出版業も始めていて、佐原出身の学者である清宮秀堅が弘化 2 年（1845）に著した『下総国旧事考』を、明治 38 年（1905）に活字で出版している。また、地方新聞の発行も手掛けていて、『佐原商報』（明治 27 年〈1894〉創刊）や『さわらタイムス』（明治 41 年〈1908〉創刊）などを編集・発行していた。

その後、建物の持ち主は替わったが、平成 20 年（2008）頃まで書店としての営業は続けられていた。平成 23 年（2011）の東日本大震災で被災したが、保存修理を施した後、店舗はテナントとして活用されることとなり、平成 29 年（2017）からはさつま芋の菓子などを販売している。



正文堂書店（昭和初期）



『下総国旧事考』の表紙と奥付

◆ 旧油惣商店 <県指定文化財>

(店舗) 年代：明治 33 年 (1900) 大火直後に
再建

規模・特徴：桁行 5 間半、梁間 3 間半、寄棟
造妻入 2 階建、棧瓦葺

(土蔵) 年代：寛政 10 年 (1798)

規模・特徴：桁行 5 間、梁間 3 間、切妻造平
入 2 階建、棧瓦葺

店舗は、明治 33 年 (1900) の大火後直後に
再建されたもの。土蔵 2 階の屋根板には、寛
政 10 年 (1798) 銘の墨書が残っている。

旧油惣商店は、忠敬橋のほど近く、新宿側
の小野川沿いに位置している。当家の祖先は、
寛政年間 (1789~1801) に津宮 (市内) から
現在地へ移り住んだと伝えられる。江戸時代
には酒造や奈良漬の製造を行っていた。佐原
における奈良漬の元祖と言われる。『佐原町誌』
によれば、寛政年間に、当主が懇意とする東
葛飾郡流山 (現流山市) で味醂を醸造してい
た堀切氏との会話の中で、十六島 (市内利根
川北岸あたり) の白瓜を味醂粕で漬けた奈良
漬を思い付き、その後、佐原の名産になった
とされる。

明治期になってからは米・砂糖・酒を扱う
問屋も営んできた。大正 3 年 (1914) 『佐原案
内』掲載広告には「奈良漬 元祖 久保木惣
右衛門」とある。また、「和洋酒店」ともある
ことから、酒類の販売も行っていたようであ
る。

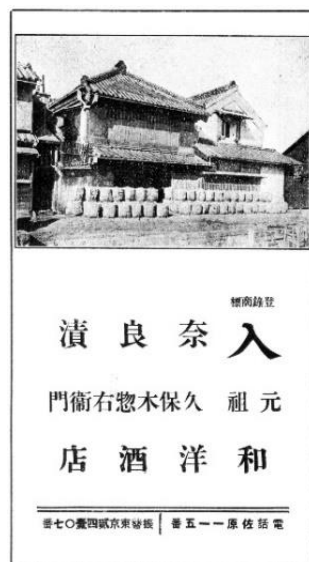
現在は、これらの商売は行っていないが、
小野川沿いのその佇まいが、往時の商家の姿を伝えている。



旧油惣商店



旧油惣商店 (大正期)



『佐原案内』(大正 3 年) 掲載広告より

◆三菱銀行佐原支店旧本館 <県指定文化財>

年代：大正3年（1914）

規模・特徴：煉瓦造、2階建、銅板葺

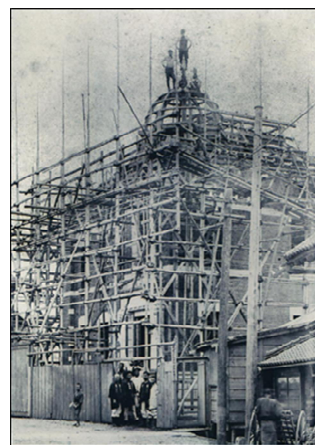
明治の洋風建築の流れをくむ、ルネッサンス調のデザイン、小屋組は木骨、当初はスレート葺、正面右隅にドームを配す、内部は吹き抜けで2階に回廊を設ける



三菱銀行佐原支店旧本館

三菱銀行佐原支店旧本館は、大正3年（1914）川崎銀行佐原支店として建築された煉瓦造の銀行で、清水満之助商店（後の清水組、現清水建設）技術部の設計によるものである。川崎銀行は、これ以前の明治13年（1880）に佐原出張所を開業し、明治31年（1898）には佐原支店に昇格させている。昭和18年（1943）には三菱銀行との合併により、三菱銀行佐原支店となった。

平成元年（1989）に新店舗を隣接して建築することにもない、旧支店の建物は市へ寄贈された。平成3年（1991）には県の有形文化財に指定され、「佐原三菱館」として観光案内所として活用されてきた。



建設中の旧川崎銀行

その後、隣接して建てられていた店舗も市へ寄贈され、佐原町並み交流館（観光案内施設）となったことで、旧本館はエントランスとして活用された。保存修理工事竣工後は、創建当初に復元した外観・内部を公開している。

◆「だし」

だしは小野川沿いに造られた石造^{いしづくり}の階段状の船着き場である。その代表的なものは正上醤油店の店舗前にあるもので、多くのだしが消滅するなか、正上のだしはかつての姿のまま残されている。前掲の「加瀬庄次郎宅」（『大日本博覧図』明治29年〈1896〉）にも店舗前に描かれている。

江戸時代には、本宿・浜宿・仁井宿・上宿・下宿といった組ごとのだしのほか、小野川沿いの各商店でも設けられていたようである。大正期の大規模な小野川浚渫と護岸工事などで、撤去されたり、位置が変わっただしもあるが、近年の再整備により復元されたものもある。



小野川沿いの「だし」



だしの連なる風景（昭和初期）

◆ 忠敬橋ちゅうけいばし

小野川と香取街道の交差する地点に位置する橋である。この場所は交通の要衝であり、中世以来、何度も橋が架け替えられて現在にいたる。ここに架かる橋は、古くは大橋おおばしと呼ばれていた木造の橋であった。

明治 15 年（1882）1 月 15 日に、村の有志の寄付により石造の隻眼橋せきがんきょうとして架け替えられ、「協橋（かなえばし）」と名づけられた。石組みで半円状のアーチを描いた橋で、住民に親しまれてきたが、年々交通量が増大するにともない、拡幅工事などを施された後、昭和 43 年（1968）に架け替えられた。その際に橋名は忠敬橋に改められた。なお、協橋に使われていた石造の橋柱が現在も残されている。



忠敬橋

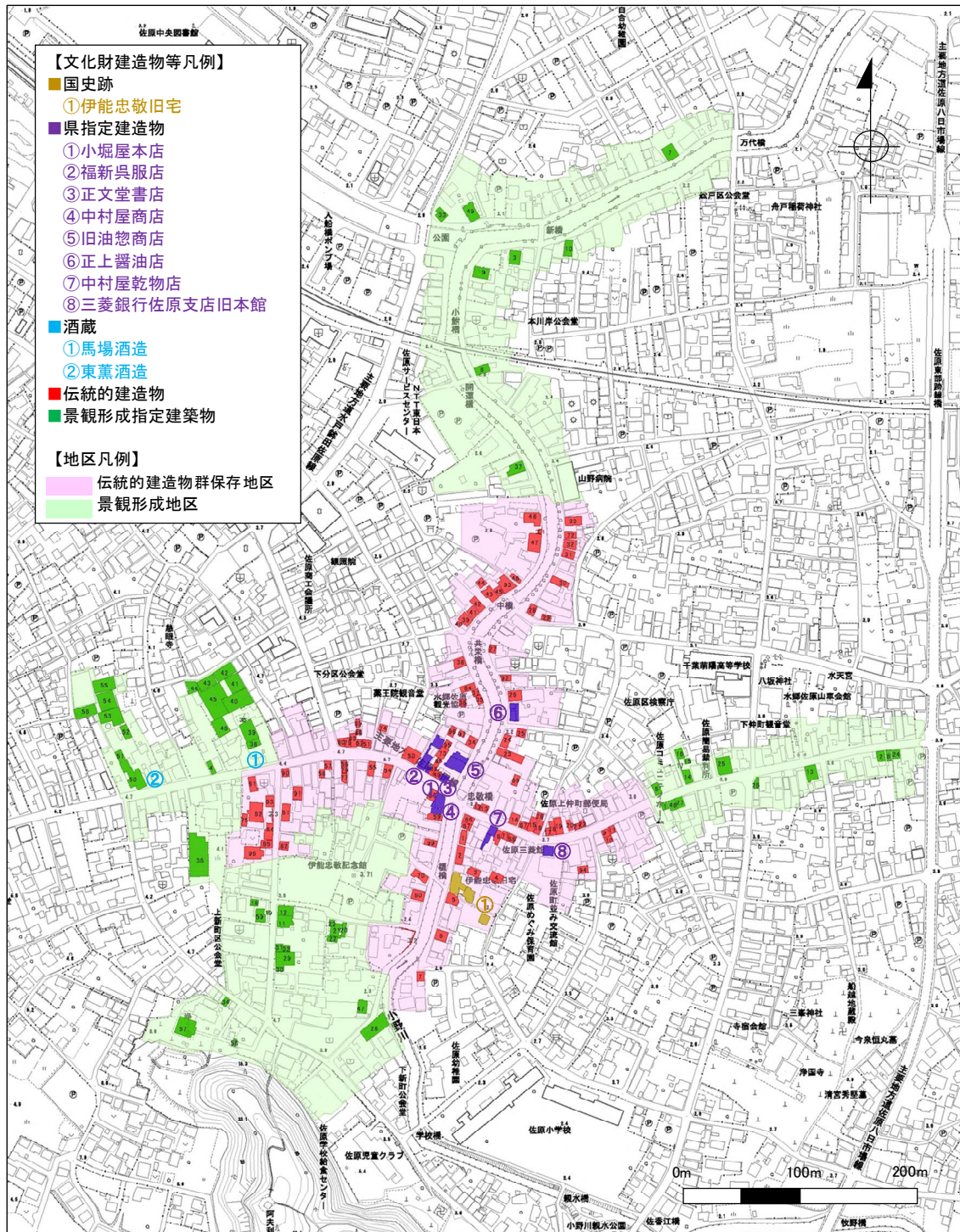


協橋（現忠敬橋・昭和初期）

④現在の町並みにおける建造物の分布

市街地を南北に流れる小野川沿いと、東西に走る香取街道沿いに形成されてきた佐原の町並みは、平成 8 年（1996）には関東で初めて重要伝統的建造物群保存地区に選定され、この地区を含めた景観形成地区周辺には、今もその土蔵や店蔵造りの店舗など多くの歴史的建造物が残り、佐原河岸として歴史的風致を形成している。代表的なところでは、国指定の史跡である伊能忠敬旧宅（店舗、土蔵など）や、県指定建造物である小堀屋本店（蕎麦屋）、福新呉服店、正文堂書店、中村屋商店、旧油惣商店、正上醤油店、中村屋乾物店、三菱銀行佐原支店旧本館の 8 件がある。また、かつて「関東の灘」の異名をとるほど盛んであった佐原の酒造りの伝統を引き継いでいる馬場酒造や東薫酒造といった酒蔵 2 軒も営業を続けている。

これ以外にも、重要伝統的建造物群保存地区において、伝統的建造物群を構成する建造物や、景観形成地区（伝統的建造物群保存地区を除く）において、景観形成上重要な価値があると認められる建造物が、佐原の町並みには多数所在している。



文化財建造物等の位置及び保存地区等の範囲

（４）佐原の山車行事について

①はじめに

佐原の中心市街地は、中央付近を南北に利根川へ向かって流れる小野川を境に、大きく二分されていて、東岸を本宿、西岸を新宿と総称している。現在は本宿には 12 町内、新宿には 29 町内があり、本宿側の鎮守は八坂神社、新宿側の鎮守として諏訪神社が鎮座している。

佐原の山車行事は、本宿祇園祭、新宿諏訪祭の付け祭りとして行われてきた祭礼行事である、祇園祭では 10 町内、諏訪祭では 15 町内（現在 1 町内は休止中）の山車が曳き廻される。上部に大人形などの飾り物を載せ、周囲に豪華な彫刻を施すなど、各町内で意匠をこらした山車が、佐原囃子の調べにのせて、勇壮に、時には厳かに曳き廻される。

平成 16 年（2004）に佐原の山車行事は、重要無形民俗文化財に指定された。さらに、平成 28 年（2016）には全国の「山・鉦・屋台行事」33 件の一つとして「佐原の山車行事」がユネスコ無形文化遺産に登録された。八坂神社境内に隣接する水郷佐原山車会館では、本宿、新宿の山車各 1 台を始め、祭礼関係資料を常時展示している。



本宿 祇園祭



本宿 祇園祭



新宿 諏訪祭



新宿 諏訪祭

②山車行事の成立・発展

佐原における山車行事の発展は、佐原の町の繁栄と密接な関係にある。利根川の舟運によって江戸と結びつき、市街地の中心部を流れる小野川の両岸は佐原河岸とも称されて年貢米や物資の集散地として、江戸時代を通じて発展してきた。^{ろくさいいち}六斎市や醸造業も盛んとなり、町場として経済的な繁栄を誇ってきた。一方、近世を通じて佐原は行政的には「村」であり、村方支配の統治機構に編制されていた。本宿は、本宿組、浜宿組、仁井宿組の三組、新宿は上宿組と下宿組の二組で構成されていた。佐原は、村でありながら商工業者や職人、奉公人などが多く住む都市的な町場である在方町であった。18世紀の半ばころまでは、土地を持つ百姓による村方三役を中心に村の運営が行われてきたが、それ以降、在方町としての経済的な発展に伴い、土地を持たない商工業者などが多く居住するようになると、それらを包括した新しい住民組織としての「町」が自治の一端を担うようになる。

このような背景のもと、佐原の山車行事は「町」の成立と発展の過程で、徐々に形作られてきた。

本宿八坂神社は牛頭天王社として14世紀後半には祀られていたが、祇園祭自体がいつ頃から始められたかは不明である。

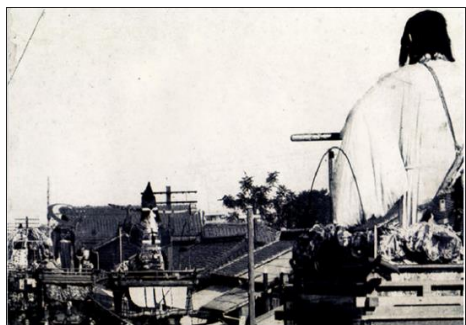
しかし、元禄15年(1702)には旧暦6月10日にお浜下り神事が、12日には祇園神事が行われていた。^{おはまお}翌年には御浜下りのあと神輿を^{おかりや}御仮屋へ留め置き、12日に戻すという神幸の形となった。その後、各町へも神輿を廻すようになり、正徳4年(1714)には初めて神輿神幸に「町」から^{ねりもの}練物(笠鉾や踊り、趣向を凝らした造り物)が出されるようになった。

新宿では、当初天王社を鎮守としていたが、町場として発展していくなかで、諏訪明神を鎮守とするようになり、享保6年(1721)に新宿名主の伊能^{ごんのじょう}権之丞などにより、練物を中心とした諏訪の祭礼を始めるようになった。

やがて、文化的・経済的に力を蓄えた「町」を中心に、両宿やあるいは各町が練物などの



本宿 祇園祭(大正10年)



新宿 諏訪祭(昭和初期)

意匠を競いながら行事を行う中で、江戸に優るものとして、四輪二層構造で大天上おおてんじょうと呼ばれる露台上ろだいに巨大な飾り物を乗せた佐原型の山車が現れるようになった。それとともに、江戸祭囃子に各種邦楽の要素と里謡や流行歌まで取り入れた佐原囃子を作り上げた。

この佐原型山車と「佐原囃子」を用いる祭礼は、佐原を中心として、千葉県北東部及び茨城県南部に広く分布している。千葉県内では香取市小見川、東庄町、多古町など、茨城県内では潮来市、鹿嶋市、旧麻生町（現行方市麻生）、旧桜川村（現稲敷市桜川）に伝播するなど、周辺地域の祭りに大きな影響を与え、一つの山車文化圏を形成するに至っている。

明治になると政府による神仏分離政策の影響などもあって、本宿の牛頭天王社は八坂神社に改められ、別当寺の清浄院しょうじょういんは廃寺となった。新宿の諏訪明神も諏訪神社となり、廃寺にはならなかったが、別当寺の莊厳寺しょうごんじは離された。

明治42年（1909）、佐原では電線が張られるようになる。山車の曳き廻しに影響が出るため、電線を高い位置に引き上げることにについて莊厳寺で集会が設けられ、該当箇所については当該町が費用を負担することと取り決められた。

国家神道政策が浸透するようになってくると、山車人形についても皇祖系の人形や南朝系の人形が飾られるようになってくる。昭和3年（1928）には、仲川岸区なかがしの明治時代に

作った神武天皇が痛んだため修理され、昭和10年（1935）には東関戸区ひがしせきどの楠木正成（大楠公）と、下分区の楠木正行（小楠公）が作られている。

戦時中においては、山車の曳き廻しはほとんど中止されたが、新宿では戦後すぐの昭和20年（1945）に例祭が執行され、4台（東関戸、西関戸、下川岸、仲川岸）の山車が曳き廻された。そして、翌昭和21年（1946）には、本宿では11台、新宿では10数台の山車が曳き廻された。なお、現在は、本宿では10台、新宿では14台の山車が曳き廻されている。



本宿 祇園祭（昭和12年）



新宿 諏訪祭（昭和初期）

③佐原の山車行事に関連する建造物

◆八坂神社（本宿鎮守）

年代：明治 21 年（1888）

規模・特徴：本殿（神明造、銅板葺、5 坪）、幣殿（銅板葺、5 坪）、拝殿（銅板葺、10 坪）、社務所（瓦葺、28 坪）

八坂神社は本宿の八日市場に位置する。古くは牛頭天王社・天王宮などと呼ばれていた。祭神は素盞鳴尊^{すさのおのみこと}。寛政 12 年（1800）閏四月に神祇伯から「祇園感神天王宮」の額面と千木・勝男木^{かつおぎ}が下されたことで感神天王宮とも称された。江戸時代の神仏習合^{しんぶつしゅうごう}の際には、同所の清浄院^{しょうじょういん}が別当寺を務めたが、明治期の神仏分離の影響により別当寺は廃寺となり、尊号も八坂神社と改称した。その後、社殿の破損により、現在の本殿・幣殿・拝殿を新築し、明治 21 年（1888）7 月に遷宮した。その際に元々西向きであった本殿を南向きに改め、境内入口は南方と西方に設けた。由緒等について不詳のところもあるが、天和 3 年（1683）には諏訪山天王台から現在地へ天王宮を勧請し、中興造立したとも伝わる。現在その天王台には八坂神社奥宮の小祠が建てられており、本宿祭礼には各町内の代表者が参拝することになっている。

天王社の名称については、応安 5 年（1372）の史料（香取文書「旧録司代家文書」）に「神天王」とあることから、これが史料上の初見であると思われる。嘉慶 2 年（1388）の史料（同前）には「佐原八日市場牛頭天王ノ東北ノツラノ在家二間」とあることから、少なくとも 14 世紀後半には牛頭天王社（八坂神社）が佐原八日市場の地に祀られていたことがわかる。



八坂神社



八坂神社（昭和初期）

◆諏訪神社（新宿鎮守）

年代：嘉永6年（1853）

規模・特徴：本殿（流造、銅板葺、2.4坪）、幣殿（銅板葺、3.56坪）、拝殿（入母屋造、銅板葺、9.47坪）、社務所（瓦葺、26.15坪）、他に神庫蔵・祭具蔵
諏訪神社は新宿の西側、諏訪台と呼ぶ台地上に位置している。その由緒について不詳の部分も多いが、一説には伊能越前守^{い のうえ ぜんの かつみ}信胤^{おお す かの しょう}が大須賀^{おお す かの しょう}荘から移り、佐原村を開発した際に、諏訪明神^{たけ み な かたの かつみ}を奉遷し守護神としたのが諏訪神社の起源とも言われる。祭神は建御名方神^{たけ み な かたの かつみ}。社伝では天正17年（1589）創建で、はじめは、伊能家の氏神的に勧請されていたものが、新宿が開発されていくにしたがい、新宿全体の鎮守へと発展していったとされている。

元禄6年（1693）に、当時の領主であった興津内記^{おき つ ない き}から諏訪大明神社領として中田1反歩が寄進されている。社殿は、享保18年（1733）に本殿等造営、文化11年（1814）修理、嘉永6年（1853）に再び造営された。なお、社殿の位置は、もともとは現在地より低い、台地の中段あたりに位置していたものを、山上付近へ移したようである。

明治の神仏分離までは、北横宿にあった諏訪山^{しょう ぐん じ}荘厳寺が別当寺を務めていた。明治6年（1873）に村社、昭和5年（1930）には郷社に列した。



諏訪神社



諏訪神社（昭和初期）

◆^{だしぐら}山車蔵

重要伝統的建造物群保存地区を取り巻くように、切妻造、瓦葺の山車蔵が建てられている。市街地を避け、周辺部に蔵が建てられているのも、幾度かの大火を経験したことによるものと思われる。明治25年(1892)の大火では、小野川岸付近から出火し、強い西北風の影響を受けて東側の本宿地区へと燃え広がり、1200棟が焼失したと伝えられている。その際、^{ようかいちば}八日市場区と^{かみなかちょう}上仲町区は、蔵もろとも山車を焼失している。その経験は、今も各町内で語り継がれている。

建築年が判然としないものが多く、大正15年(1926)の祭礼を映した古写真に、^{きた}北横宿、^{よこじゆく}新橋本、^{しんはしもと}下新町の山車蔵が確認できる。また、八日市場の蔵は明治25年(1892)の大火後、再建するも、昭和23年(1948)に再び火災に見舞われ、昭和26年(1951)に再建し現在に至っている。

標準的な規模としては、幅4m、奥行き5m、高さ6mほどである。伝統的な構造としては木造切妻造妻入、平屋建て、瓦葺で、扉は観音開き、外壁は土壁下見板張りである(経年の腐朽等により、下見板張りからトタン張りへと改修が行われている)。老朽化した蔵は平成期にその多くが建て替えられ、建て替えの際、飾り付けされた状態で山車が収納できるよう、規模を大きくし、構造も鉄骨造平屋建て、外壁は発泡コンクリート板仕上げ、電動シャッター式のものが主流となっている。その一方で、伝建地区に近接する景観形成地区内に所在する山車蔵は、伝統的な建築様式により新築されている事例もある。



新橋本・下新町・中宿の山車蔵
下新町の山車蔵は旧来の工法で建て替えられた



新宿諏訪祭(大正15年)
右手手前から北横宿・新橋本・下新町の山車蔵



八日市場の山車蔵
木造瓦葺観音開きの蔵

山車蔵は、町のシンボルである山車が1年の大半を過ごす場所である。したがって、祭りの準備、後片付けはもちろん、定期的な点検の時も町民がここに集い、山車の清掃・点検などを通して、世代間の交流を深める場ともなっている。祭りは特別な時間

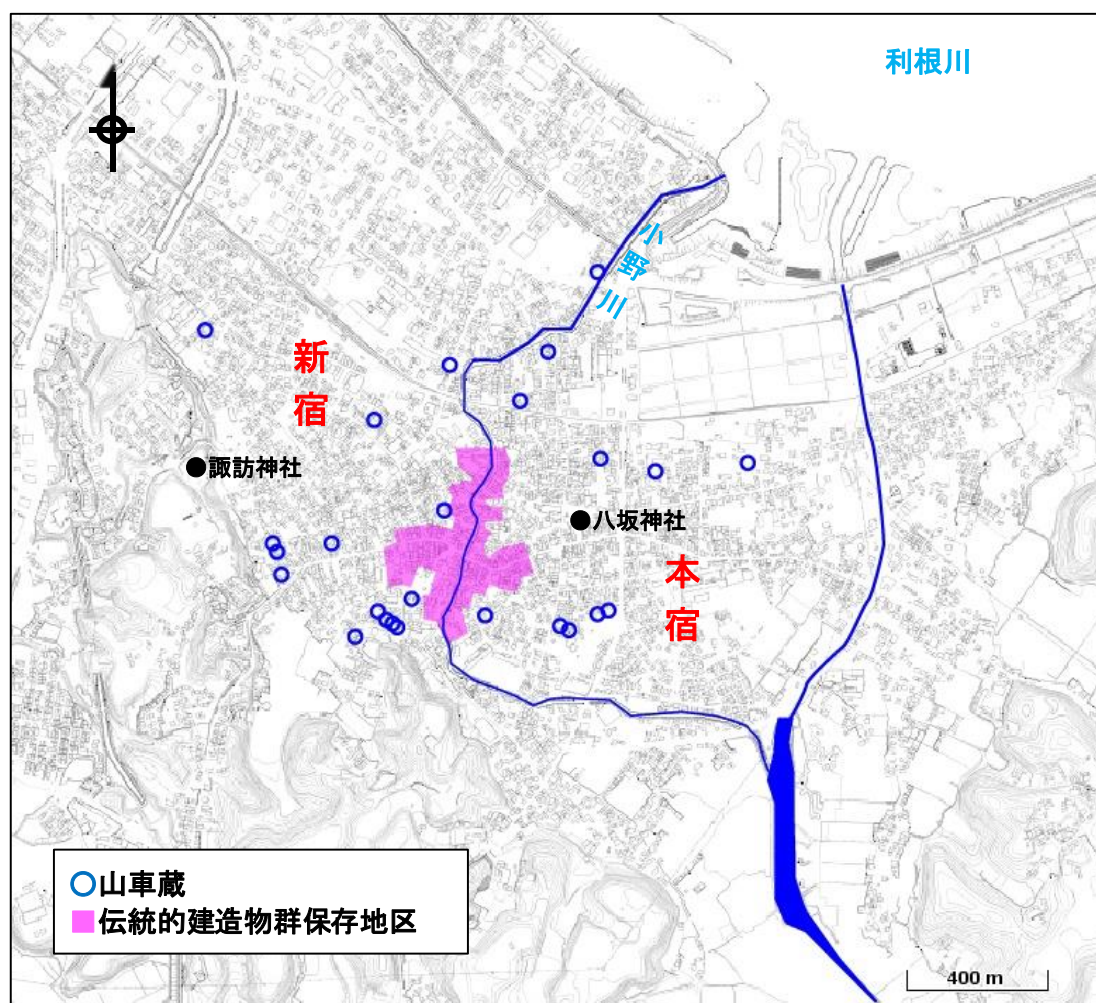
であり、町全体が特別な空間となるが、山車蔵では、日常の、何でもない普段の時間と空間の中で、山車と接することのできる大切な場所でもある。



八日市場 山車蔵内部



山車蔵に集う若者



山車蔵の位置

④佐原の山車行事を伝承する人々の活動

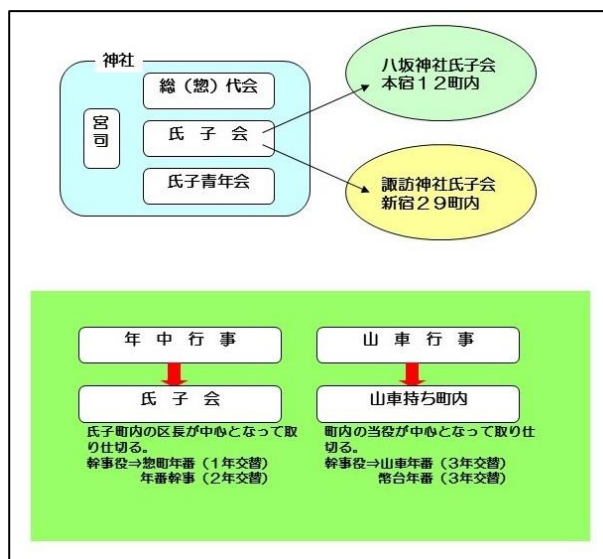
ア) 組織・運営

佐原の山車行事は、前述したように本宿祇園祭、新宿諏訪祭の付け祭りとして行われてきた祭礼行事である。

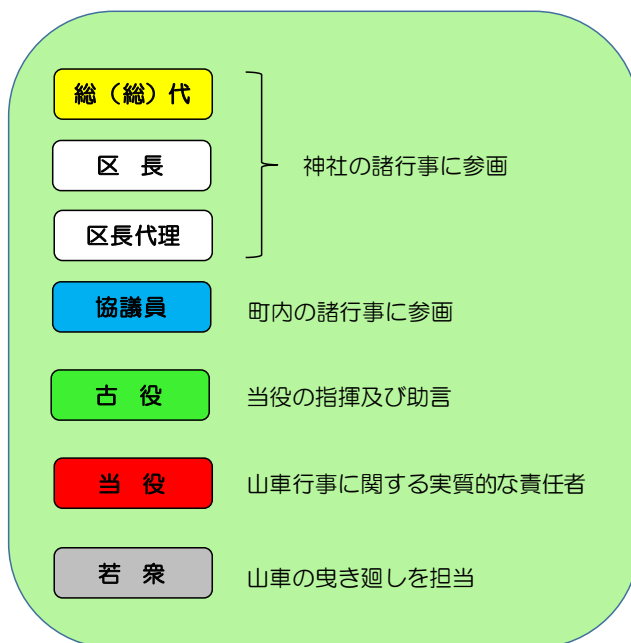
神社の年中行事は氏子会が中心となって運営される。氏子会は、本宿は12の氏子町内、新宿は29の氏子町内で構成されている。一方、山車行事については、山車を持つ町内によって運営されている。本宿は10町内、新宿は14町内となっている。

山車行事の運営は、本宿、新宿ともに山車を所有する町内から持ち回りで選ばれる当番を中心に行われる。この当番は本宿では山車年番、新宿では幣台年番と呼び、両宿とも任期は3年である。また、前期に年番を務めた町内を前年番、次期に年番を務める町内を後年番とし、この三つの町内を前後三町と称している。山車の運行等の行事計画は、この前後三町が協議して決定し、行事に際しては年番町が一切を取り仕切る。

山車行事に関する各町内の組織には、古役、当役、若衆といった年齢階梯（年齢順の段階）的な性格の強い役割があり、山車の運行に関しては当役が責任を任されていて、当役長を始めとする十数名の当役がいる。その下に若衆頭を筆頭とする若衆たちがいて、てこ棒や担ぎ棒を巧みに操り山車の曳き廻しを行う。古役は当役に指導、助言する役目で、当役経験者から選ばれる。



神社の組織



町内の組織

イ) 準備等

祭礼の準備は、各町内や氏子会などにより数カ月前より進められる。本宿祇園祭礼では、毎年、6月1日に行われる八坂神社氏子会の会議（惣町会議）において、神輿の神幸順路と山車行事の計画案が審議される。7月1日には惣町参会と呼ばれる会議において、神輿御神幸、山車行事の最終説明と確認が行われる。また新宿諏訪祭でも、毎年、9月1日に行われる諏訪神社氏子会の会議（八朔参会）において、神輿の神幸順路と山車行事の計画案が審議される。9月中旬には惣町当役会議と呼ばれる会議において、山車行事の最終説明と確認が行われる。

また、これらの会議のほかに、各町内では様々な準備が行われる。例えば、山車には佐原囃子を演奏する下座^{げざ}という囃子方が乗り込むが、下座に乗り込みをお願いする「下座頼み」がある。これはそれぞれの町内を担当する下座連へ区長をはじめとする役員や古役、当役、若衆など20名前後が挨拶に行き、正式に下座の乗演を依頼するものである。下座の代表者から受託の回答があったのちは、下座の実演も行われる。



下座頼みでの実演

祭礼が近くなると踊りの練習も行われる。これは若衆が主体となって、町内の子供たちに踊りの指導をするもので、町内の子供たちは若衆の踊りに合わせて一緒に踊り、これを体得していく。

祭礼の1週間ほど前になると、各町内では山車の準備が行われる。当役の指示にしたがい、若衆が祭礼幟・照明器具・看板の設置、提灯の配布を行い、山車蔵では、山車の清掃と、組み立て・飾りつけなどを行い、祭礼に備える。



踊りの練習風景



山車の飾り付け

ウ) 番組行事・曲曳き

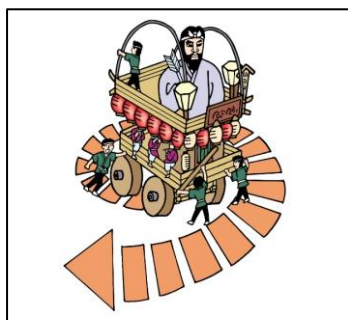
山車行事は、両宿とも3日間行われる。行事の次第は、年番の引継ぎが行われる年とそれ以外の年とで異なり、前者を本祭式、後者を例祭式と称し、それぞれの町内が氏子区域を自由に曳き廻す乱曳きや、全町内の山車が集まって順列を組み、所定の位置を定めて行う番組行事、山車の曳き廻しの見せ場でもある曲曳きなどが当番町の指揮によって3日間の中で組み合わせられて行われる。番組行事は、山車が勢揃いしての氏子区内の巡行や、巡行の開始時に囃子を順番に演奏していく「通し砂切」などがあり、年番町の山車から順次行われるのが決まりである。

山車の曲曳きは、「のの字廻し」「こばん廻し」「そろばん曳き」の三種類がある。「のの字廻し」は、前輪を軸にして山車を時計回りに回転させるもので、山車をいったん止めてから行う方法と、止めずに行う「まわしこみ」がある。回転演技中はゆっくり廻しかつ山車の停止は恥とされる。「こばん廻し」は、楕円形を描くように曳き廻すもので、常に一定速度と角を曲がる技術は派手さこそないが難度が高い。「そろばん曳き」は、数十メートルの距離を緩急つけて直線的に往復するもので、豪快さと速さ、山車を止める力強さが見られる。

なお、曲曳きは「のの字廻し」を中心に行われており、他の2つが行われる頻度は多くはない。



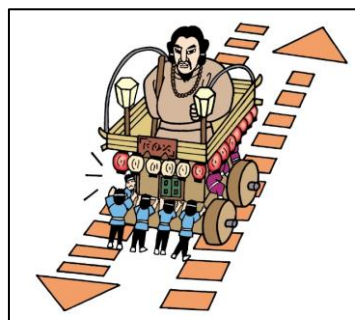
のの字廻しの披露



のの字廻し



こばん廻し



そろばん曳き

エ) 佐原囃子と下座連

佐原囃子は、リズム中心の他地域の祭り囃子とは異なり、情緒的なメロディを主体とする独特の祭り囃子である。50 曲以上のレパートリーを持ち、それらは段物、役物、端物の 3 つに分類される。

段物は、佐原囃子の神髄とされ最も洗練された格調高い音曲で、能や歌舞伎の影響を受けており、全国の祭り囃子の、どの系譜にも属さない佐原独特のものである。山車がメイン通りをゆっくりと通過するときに演奏される。

役物は、神田囃子や江戸囃子の系統をくむ一本笛と太鼓、摺り鉦を中心演奏され、儀式的な意味合いを持つ音曲である。出発と帰還には必ず役物が演奏される。

端物は、俗曲や他の地方の囃子を佐原囃子調にアレンジしたものなど、比較的テンポが速く賑やかで、多数の曲目がある。山車が曳き廻される道の雰囲気や、場面に合わせ、これらの曲目が下座連により演奏される

分類	主な曲目
段物	吾妻、巢籠り、さらし、神田、八百屋、段七、曾我、盾、くずし
役物	砂切（さんぎり）、馬鹿囃子、はな三番叟
端物	おやまか、猫じゃ、矢車、巢籠りくずし、津島、吉野、剣囃子、大和、佐原音頭、佐原小唄、松飾り、あんば、大杉あんば、大漁節、ラッパ節、船頭小唄、串本節、等々

佐原囃子の曲目

佐原囃子を演奏する囃子方は下座と呼ばれ、各町内の山車に乗り込んで佐原囃子を演奏する。下座の構成は、笛 5～6 名、太鼓 1 名、小鼓 4～5 名、大太鼓 1 名、摺り鉦 1 名の 15 名前後である。

下座連は、山車の運営組織とは別の組織であり、戦前までは周辺農村の下座連が山車に乗って囃すのが通例であった。戦後は、農村における下座連の後継者不足から佐原市内の若者たちが下座連を組織し始め、今日では多くの団体が活動しており、両宿の間で相互に囃子を担当し合うような現状もある。



下座による佐原囃子の演奏

オ) 山車行事の流れ

I. 本宿祇園祭

祭礼日：祇園祭は 7 月 10 日以降の金・土・日曜日の 3 日間。古くは旧暦 6 月 10 日から 12 日に行われていた。

氏子町内 (12)：^{かみなちちょう}上仲町、^{あらく}荒久、^{ほんが}本川岸、^{しやうかいちば}八日市場、^{はまじゆく}浜宿、^{てらじゆく}寺宿、^{たじゆく}田宿、^{にいじゆく}仁井宿、^{ふなど}船戸、^{しもなちちょう}下仲町（以上山車持ち町内）、^{ほんはしもと}本橋元、^{むこうづ}向津

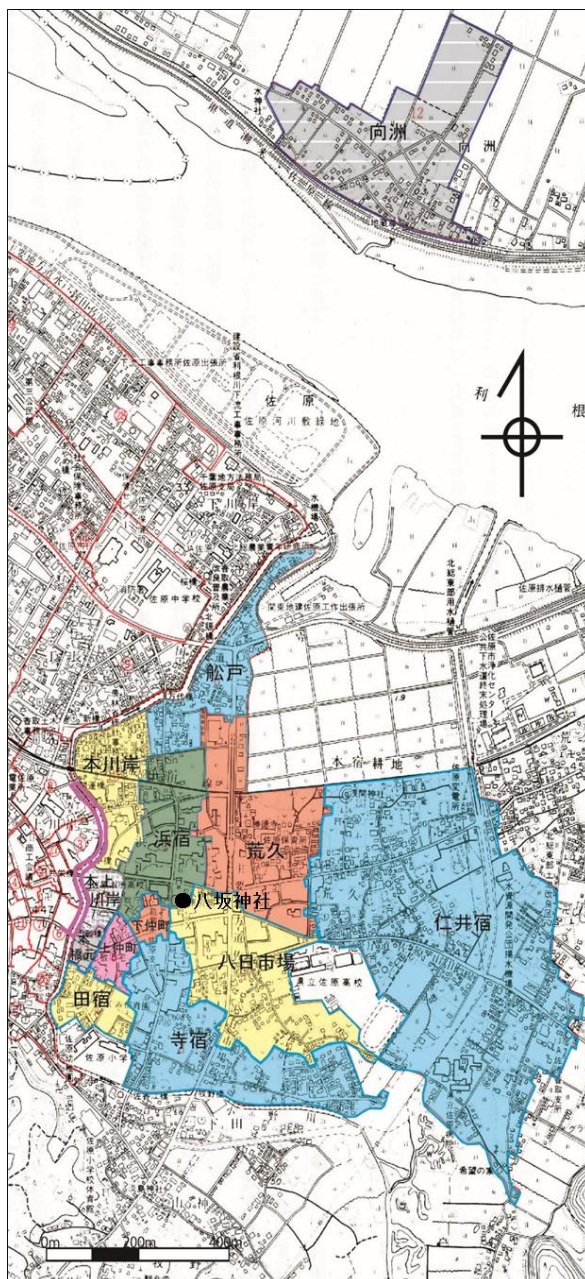
(平成 30 年度)

八坂神社での祇園祭 7 月 10 日(火)

行事としての本宿祇園祭は 7 月 10 日以降の金・土・日に実施されるが、祭祀としての八坂神社祇園祭は 7 月 10 日が祭礼日である。祭礼日当日は、朝 7 時に社殿・境内の清掃、神輿の飾り付けなどの設営準備をし、9 時から年番区の使者が三役（獅子を受け持つ八日市場区、猿田彦を受け持つ仁井宿区、神楽を受け持つ浜宿区）へ祇園祭執行の挨拶をした。10 時から氏は会役員や来賓などが神社に参集し、昇殿のあと、祇園祭が執行され、終了後は直会となった。

1 日目 7 月 13 日(金)

午前 10 時から、山車の乱曳きが始まる。この日は 9 台の山車が自町内を中心それぞれ曳き廻された。曳き廻しの途中では、随時、山車の前で若衆による手踊り^{ておど}が披露され、また、山村会館前交差点（おまつりステージ広場前）では、随時「のの字廻し」が披露された。



本宿町内図

(山車持ち町内は着色、その他の氏子町内は灰色で表示)

2日目 7月14日（土）

午前10時から、10台の山車の乱曳きが始まる。町内ごとに設定したコースを曳き廻した後、午後5時には山村会館交差点近くの寺宿通りに、年番の上仲町区を先頭に一列に整列した。午後6時になると、一齐に提灯の灯りがとまり、各町総踊りを行った後、「通し砂切^{とお さんぎり}」が演奏される。

「砂切」とは山車の出発、到着に際して下座が演奏する儀式的な曲で、これを先頭の1台目から順に演奏することを「通し砂切」と言う。これが済むと、先頭の山車から順に、山村会館前交差点へ進み、豪快な「のの字廻し」を披露し、そのまま曳き分かれとなり、各町それぞれ乱曳きとなった。



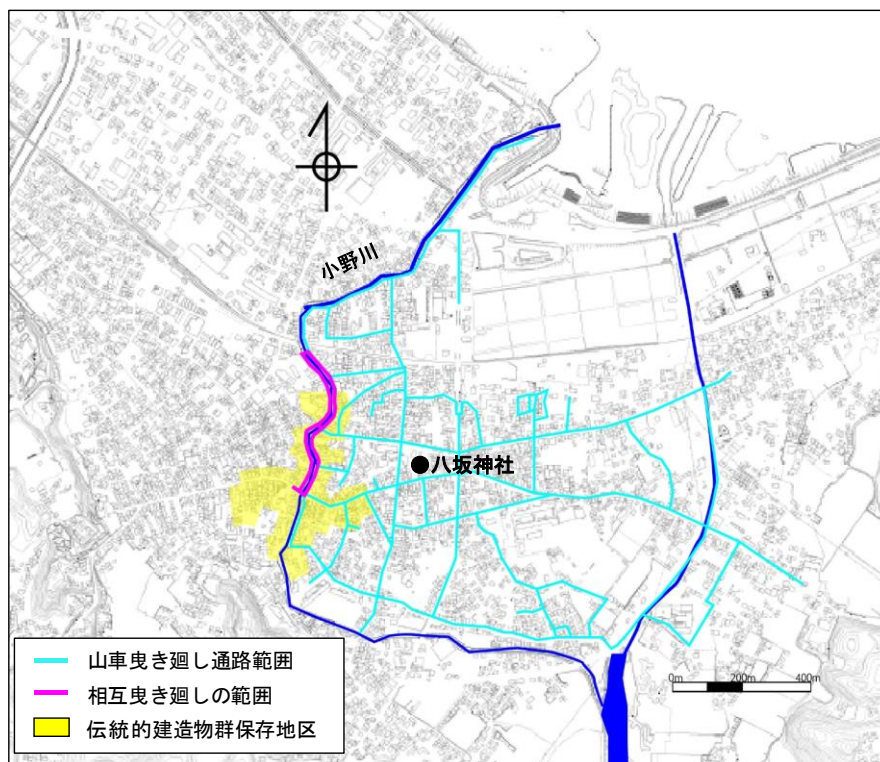
寺宿通りに整列した山車



曳き廻しの様子

3日目 7月15日（日）

午前10時から、山車の乱曳きが始まり、町内ごとに所定のコースを曳き廻す。その間、随時、山車の前で若衆による手踊りが披露され、また、山村会館前交差点（おまつりステージ広場前）では、随時「のの字廻し」が披露された。



本宿祇園祭での山車曳き廻し通路図

この日には、神輿の神幸が行われた。午前 11 時過ぎに八坂神社を発した神輿が各町内を練り歩き、午後 8 時頃に八坂神社へ戻った。

なお、本宿祇園祭と新宿諏訪祭は小野川を境にそれぞれの鎮守の祭礼として行われてきた。このため小野川を超えて対岸で山車を曳き廻すことはなかったが、観光振興や地域活性化のため、平成 8 年（1996）9 月 1 日に本宿・新宿双方の取り決めにより、小野川沿いの一定のエリアに限って相互に曳き廻すようになった。このため小野川沿いの新宿側エリアでも、本宿の山車は曳き廻されている。

凡例		町内名		飾り物	
①山車製作年		②飾り物製作年			
	上仲町	太田道灌	①明治 34 年（1901 年） ②大正 10 年（1921 年）		荒久 経津主命
	本川岸	天鈿女命	①明治 15 年（1882 年） ②文化元年（1804 年）		八日市場 鯉
	浜宿	武甕槌命	①平成 9 年（1997 年） ②昭和 12 年（1937 年）		寺宿 金時山姥
	田宿	伊弉那岐命	①嘉永 4 年（1851 年） ②明治 43 年（1910 年）		仁井宿 鷹
	船戸	神武	①平成 9 年（1997 年） ②明治 20 年（1887 年）		下仲町 菅原道真

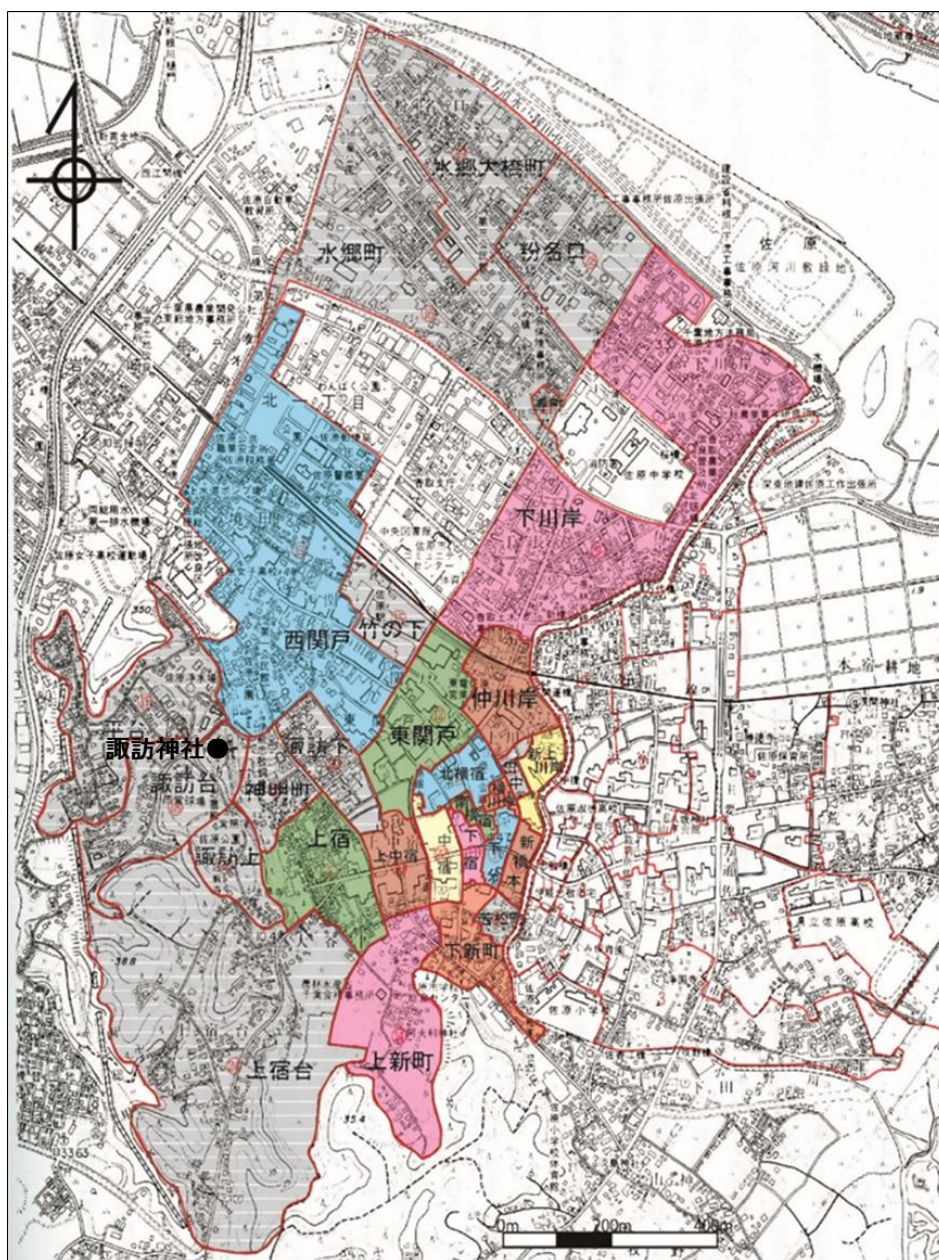
本宿 山車一覧（10 台）

Ⅱ. 新宿諏訪祭

祭礼日：諏訪祭は、10月第2土曜日を中日とする金・土・日曜日の3日間

古くは、祭日は旧暦8月27日であった。

氏子町内 (29)：^{しもわけ}下分、^{なか が し}仲川岸、^{した が し}下川岸、^{かみなかじゆく}上中宿、^{しもじゆく}下宿、^{ひがしせきど}東関戸、^{にしせきど}西関戸、^{かみしん}上新町、^{きたよこじゆく}北横宿、^{しもしんまち}下新町、^{しんうわ が し}新上川岸、^{みなみよこじゆく}南横宿、^{かみじゆく}上宿、^{しんはしもと}新橋本（以^{なかじゆく}上山車持ち町内）。^{なかに}中宿（山車は現在休止中）、^{たけ}竹の下、^{した}水郷町、^{す わ だい}平台、^{ことぶきちよう}諏訪台、^{す わ した}寿町、^{よこ が し}諏訪下、^{しんめいちよう}横川岸、^{かみじゆくだい}神明町、^{す わ うえ}上宿台、^{わかまつちよう}諏訪上、^{た なか}若松町、^{こ な ぐち}田中、^{すいごうおおはしちよう}粉名口、^{すいごうおおはしちよう}水郷大橋町

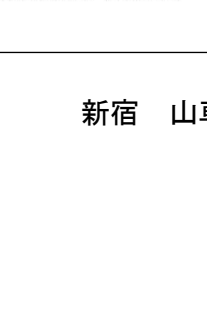
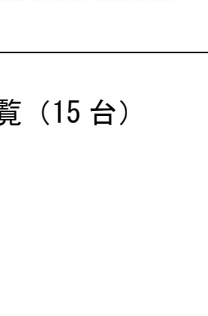


新宿町内図（山車持ち町内は着色、その他の氏子町内は灰色で表示）

凡例

町内名
飾り物

①山車製作年
②飾り物製作年

 上中宿 鎮西八郎為朝 ①嘉永 5 年 (1852 年) ②明治 15 年 (1882 年)	 上新町 諏訪大神 ①昭和 11 年 (1936 年) ②昭和 11 年 (1936 年)	 南横宿 仁徳天皇 ①明治 8 年 (1875 年) ②大正 14 年 (1925 年)	 北横宿 日本武尊 ①明治 8 年 (1875 年) ②明治 8 年 (1875 年)	 上宿 源義経 ①昭和 53 年 (1978 年) ②昭和 55 年 (1980 年)	 下分 小楠公 ①明治 28 年 (1895 年) ②昭和 10 年 (1935 年)	 仲川岸 神武天皇 ①明治 29 年 (1896 年) ②明治 31 年 (1898 年)	 東関戸 大楠公 ①昭和 10 年 (1935 年) ②昭和 10 年 (1935 年)	 下新町 浦嶋太郎 ①江戸後期 ②明治 12 年 (1879 年)	 新橋本 小野道風 ①明治 27 年 (1894 年) ②明治 4 年 (1871 年)	 下川岸 建速素盞鳴尊 ①明治 31 年 (1898 年) ②江戸後期	 西関戸 瓊瓊杵尊 ①昭和 10 年 (1935 年) ②昭和 12 年 (1937 年)	 新上川岸 牛天神 ①大正 4 年 (1915 年) ②江戸後期	 中宿 桃太郎 ①江戸時代後期 ②大正 11 年 (1922 年)
---	---	---	--	--	---	--	--	---	--	--	---	---	--

新宿 山車一覧 (15 台)

(平成 30 年度)

1 日目 10 月 12 日 (金)

午前 8 時 30 分から諏訪神社にて祭礼及び安全祈願祭が執行された。社殿前に氏子年番幹事長や山車年番区の区長、当役長などを始めとする関係者が参集し、祝詞奏上、玉串奉奠のりとそうじょう たまぐしほうてんなどの祭式の後、各町内へ御神符と御神酒が手渡された。

午前 10 時から、山車の乱曳きが始まった。この日は 13 台(上中宿は休止)の山車が、自町内を中心にそれぞれ曳き廻された。曳き廻しの途中では、随時、山車の前で若衆による手踊りが披露され、また、指定場所(6 か所)では、随意「のの字廻し」が披露された。

午後 3 時から、諏訪神社から御旅所(東通り)まで、神輿の渡御が行われた。

2 日目 10 月 13 日 (土)

午前 10 時から、山車の乱曳きが始まった。この日は「幣台行事」として、13 町の山車が 12 時頃までに、香取街道に整列した。13 時頃からは「通し砂切」が演奏される。その後、「山車巡行」(揃い曳き)が行われ、13 台の山車が行列を組んで巡行し、小野川沿いを上り、わくわく広場前で順次曳き分かれとなった。以降は、それぞれ乱曳きとなった。



諏訪神社祭礼・安全祈願祭



すれ違う山車



手踊りの披露



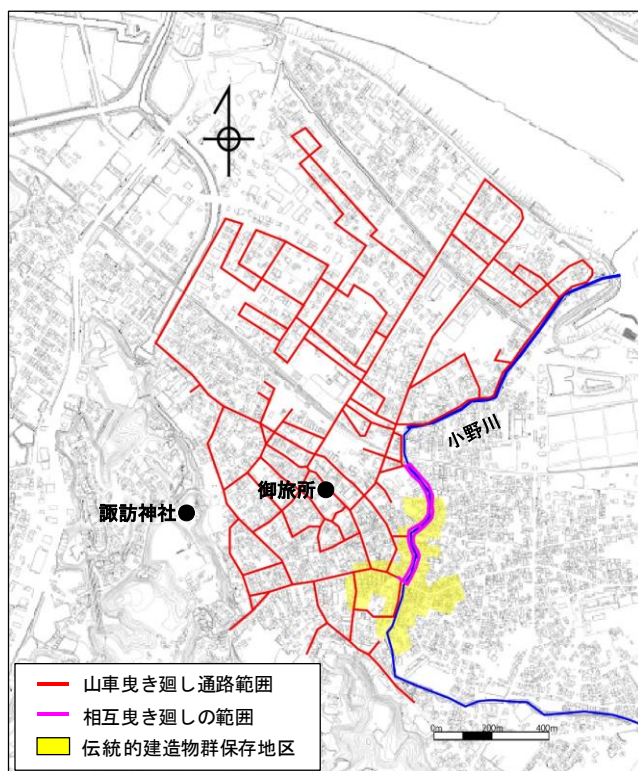
のの字廻し

3日目 10月14日（日）

最終日は、午前10時から山車の乱曳きが始まり、町内ごとに所定のコースを曳き廻す。その間、随時、山車の前で若連の手踊りが披露され、また、指定場所では、「のの字廻し」が披露された。

この日は、午前9時から神輿の渡御が行われ、御旅所を発した神輿は一日かけて、町中を練り歩き、午後6時頃に諏訪神社へ戻った。

なお、本宿祇園祭の項で先述したとおり、新宿諏訪祭においても、平成8年（1996）の取り決めにより設定した小野川沿いの本宿側のエリアでも新宿の山車は曳き廻されている。



新宿諏訪祭での山車曳き廻し通路図

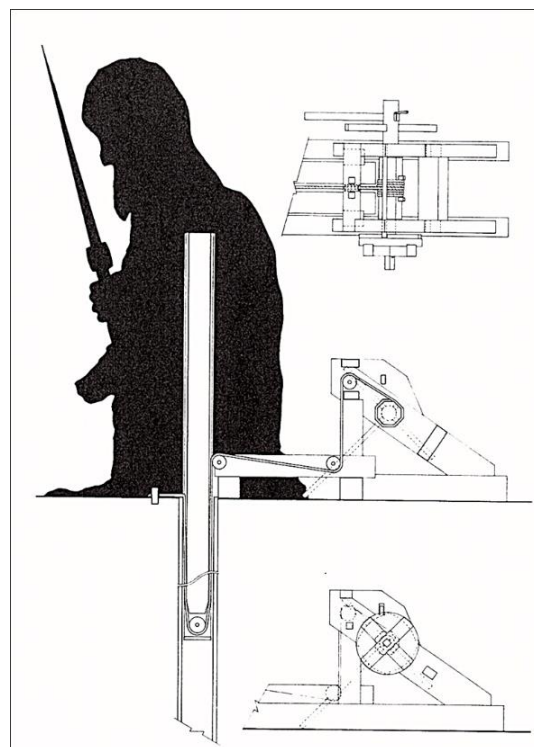
⑤山車について

ア) 山車の構造

山車は、いずれも四輪の二層構造で、最上部の^{おおてんじょう}大天上（^{ろだい}露台）とその下の^{ちゅうてん}中天（^{じょう}囃子台）とから成る。2本の車軸の上に土台を乗せ、土台に立てられた6本または8本の柱によって二層を支えている。

車輪は木製で、地元ではハンマと呼ばれる。直径1メートル前後、厚さ30センチ前後で樺材を使用している。構造は十文字に組んだ部材の四隅に扇状の部材が差し込まれている。

一層目の柱間には敷居や鴨居などを設

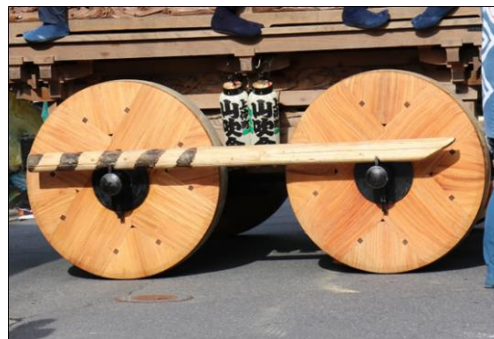


山車人形迫り出し仕掛け図
（『佐原山車祭調査報告書』より）

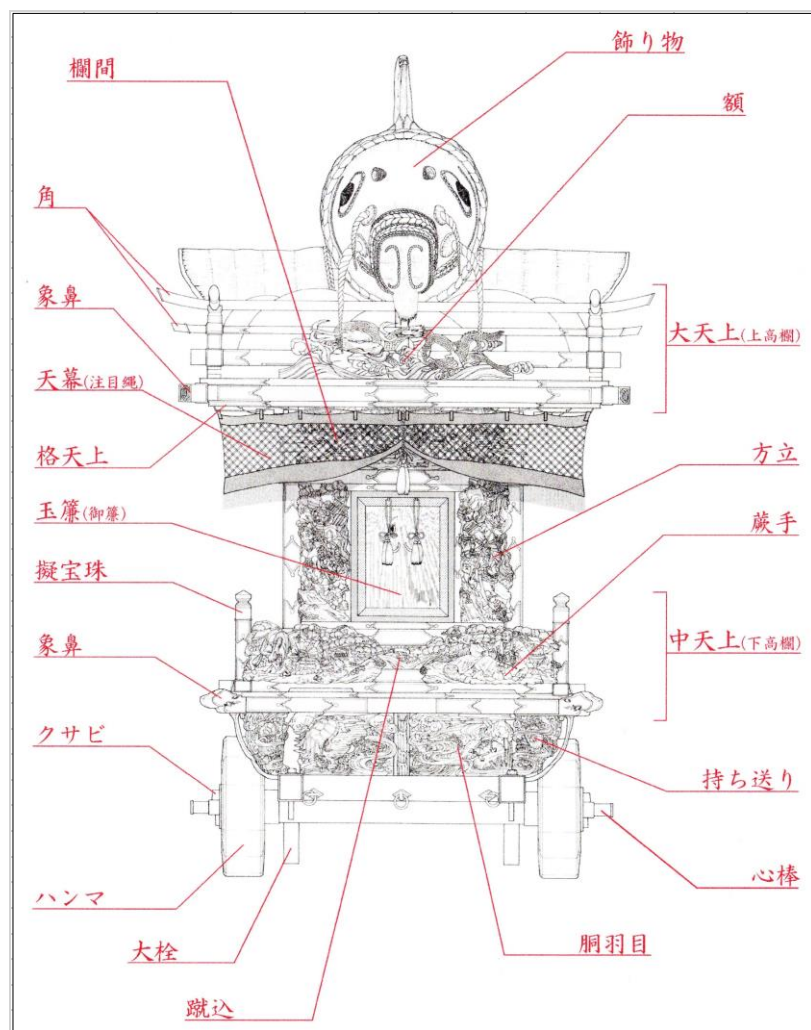
け、正面を御簾または玉簾で塞ぎ、側面には障子を嵌め込んでいる（曳き廻す際には取り外す）。周囲には擬宝珠高欄様の手摺りが取り付く。ここには下座連とよぶ囃子方が乗り込む。

二層目は露天となっていて、周囲に跳高欄はねこうらんを廻している。本体の中央には「迫り出し」あるいは「人形柱」とよぶ真柱しんばしらを立てて、その先端に「飾り物」と呼ぶ大人形や造り物を取り付けている。曳き廻し時や停車時など状況により、柱の装置を操作して、人形を上げ下げしている。また、大天上の周辺には幕や注連縄が吊り下げられている。

使用される材は、主にケヤキ材を用い、その他にヒノキ材やカシ材などもある。



山車の車輪（ハンマ）



山車の構造図（『佐原山車祭調査報告書』より）

イ) 山車の彫刻

柱間には鳥獣や説話などを題材とした彫刻が飾り付けられる。彫刻は「関東彫り」と呼ばれ、ケヤキ材の木地を生かし、重厚かつ繊細に彫られており、後藤茂右衛門、石川三之助、小松光重、金子光晴など、名工と呼ばれた彫工の作品が多く残されている。

彫刻の構図は、龍や獅子、花鳥のほか、日本神話などの伝記物、太平記、太閤記などの軍記物、三国志、水滸伝などの中国の故事を題材としている。



西関戸区 龍
嘉永年代（1848～1854）
四代目石川藤吉朝光作



下新町区 水滸伝
文久2年（1862）
石川三之助作



八日市場区 太閤記・加藤
清正、明治21年（1888）
小松重太郎光重・光春作

ウ) 飾り物・大人形

飾り物は、高さ 3～5 メートルにも及ぶ一人立ちの大人形が主流で、歴史上の人物を題材にした人形が多く見られる。この大人形は、明治・大正期にかけて名人といわれた人形師たちによって製作されたものである。その嚆矢は、関戸町の猿田彦^{こうし さる た ひこのみこと}命にある。享保 18 年（1733）の諏訪神社造営があった年、付け祭りは盛りあがり、関戸町では飾り物に伊能権之丞から借用した夏夜着を着物にして、猿田彦命にして飾ったところ、大当たりをとり、以来、関戸町は猿田彦を飾るようになり、次第に大きなものを作るようになったという。その後、多くの町内がこれに倣うようになったようである。



関戸 猿田彦(明治 42 年)

かつては、各町内が年々に当世風の新たな趣向を凝らし、藁などを用いて飾り物を製作してきたと伝えられるが、江戸後期になると江戸の人形職人に飾り物の製作を依頼するようになり、等身大の人形を組み合わせた芝居や物語の場面を象ったものから、一人立ちの巨大な大人形へと展開していったとされる。

ただし、大人形が主流になっ
てはいるものの、本宿の山車には、今日でも八日市場区^{ようかいちば}の麦藁の鯉や、仁井宿区^{に いじゆく}の稲藁の鷹など、町内の人たちの手により製作される飾り物もある。また、下川岸区^{した が し}の「素盞鳴命」^{すさのおのみこと}や新上川岸区^{しんうわ が し}の「牛天神」^{うしてんじん}に飾り物の古態を見ることができる。



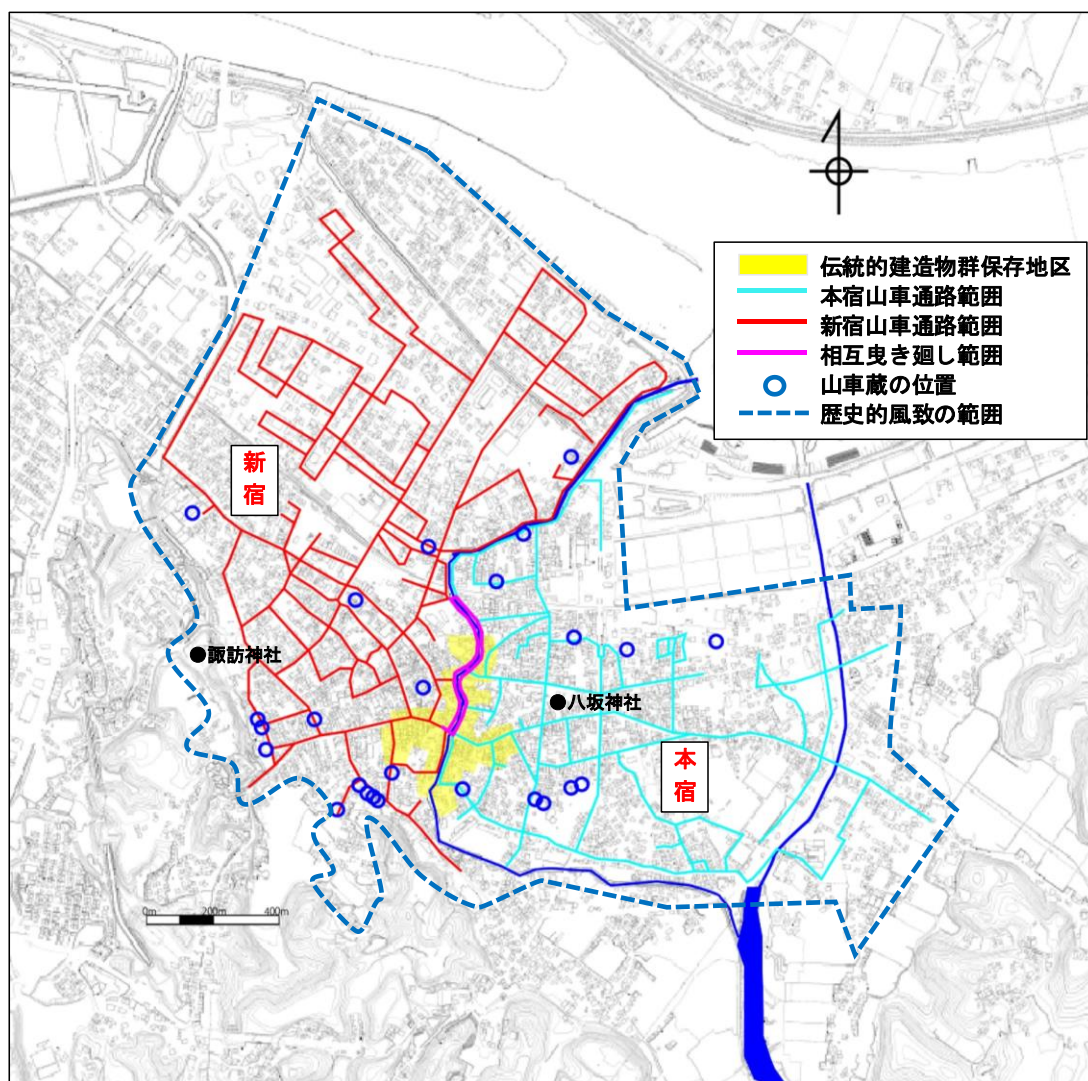
新上川岸区 牛天神



仁井宿区 鷹

(5) まとめ

佐原の中心市街地は、江戸時代に利根川舟運の発達により商家の町として発展し、小野川と通称香取街道沿いを中心に町並みを形成してきた。今も多くの商家の建物と往時の景観が残る町並みは重要伝統的建造物群保存地区に選定された。また、「関東の灘」の異名をとるなど酒造りも盛んとなり、その伝統を引き継ぐ酒蔵が現在も営業を続けている。佐原の山車行事は、その佐原の町並みが舞台となる祭礼行事で、夏には本宿・八坂神社の祇園祭、秋には新宿・諏訪神社の諏訪祭が行われている。本宿は10町内、新宿15町内の山車持ち町内により、組織だって運営され山車が曳き廻される。その範囲は、山車持ち町内のみならず、広く氏子町内におよぶが、佐原囃子の調べのもと、山車が曳き廻される様子は、店舗や土蔵などの歴史的建造物が建ち並ぶ町並みと相まって、独特の歴史的風致を形成している。



佐原の町並みと山車行事に見る歴史的風致の範囲

コラム1 樋橋（じゃあじゃあ橋）

伊能忠敬旧宅前に架けられている小橋である。江戸時代には、本宿・新宿の市街地を、農業用水路が流れていたが、樋橋はその本宿から新宿へ用水を繋いでいた掛樋である。上部に板を渡して人も渡れる橋にもなっていたようである。水量が多い時や、用水のいらぬ時期には、掛樋から小野川へ水が落とされ、その流れる音から「じゃあじゃあ橋」とも呼ばれるようになった。

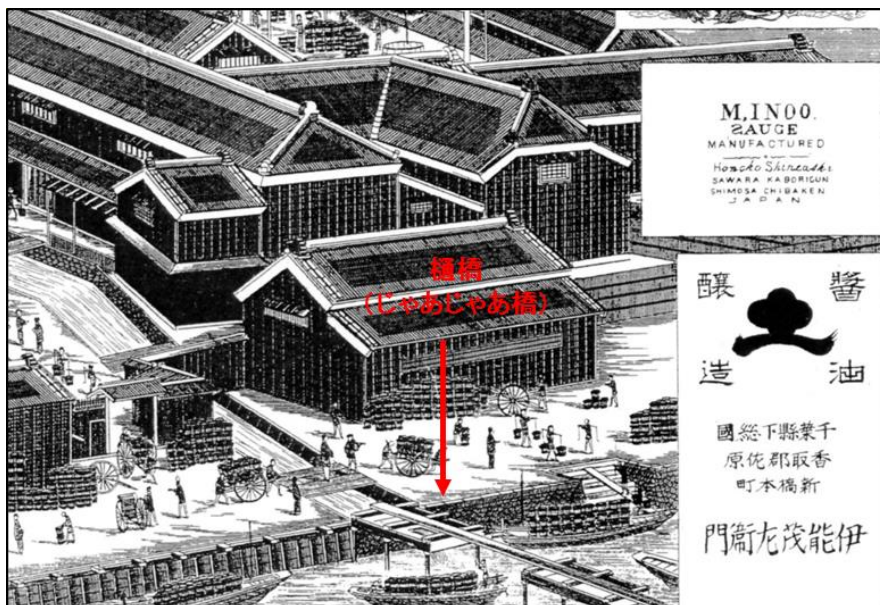
明治30年（1897）『大日本博覧図』には「伊能茂左衛門」宅の図に、小野川に架けられていた木製の樋橋が描かれている。その後、昭和初期に木造橋からコンクリート橋にかわったが、平成4年（1992）に木橋に架け替えられ、数十分ごとに水が流れ落ちる仕組みとなっている。平成8年（1996）に環境庁（現環境省）の「残したい日本の音風景100選」に選ばれている。



樋橋（じゃあじゃあ橋）



コンクリート製の樋橋
（昭和32年〈1957〉）



伊能茂左衛門宅前の樋橋（じゃあじゃあ橋）

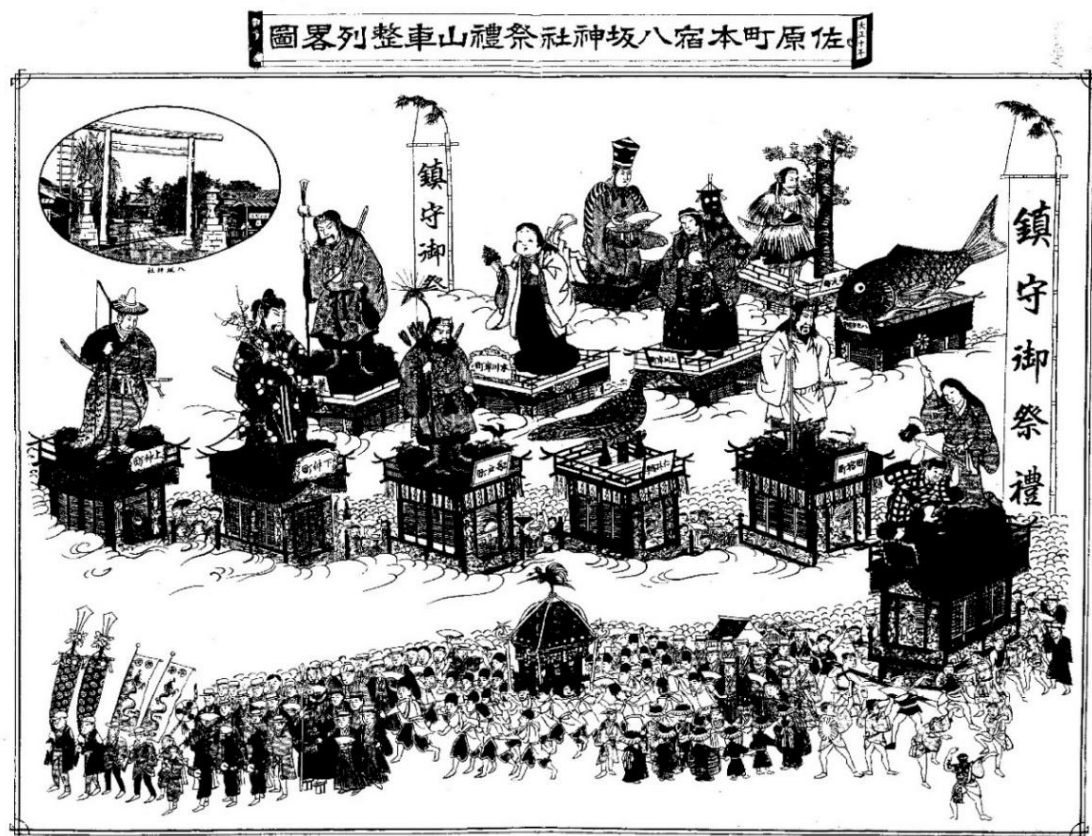
（『大日本博覧図 第12編』部分、精行社・明治30年、常総市所蔵、一部加筆）

コラム2 「佐原の山車」 整列・番組図

以前の佐原の山車が絵に描かれた資料は少ない。その中で、大正10年(1921)の「佐原町本宿八坂神社祭礼山車整列略図」や、明治42年(1909)の「佐原町諏訪神社大祭山車番組之図」では、それぞれ本宿、新宿の山車の様子をうかがい知ることができる。

◆大正10年(1921)「佐原町本宿八坂神社祭礼山車整列略図」

現在、本宿の山車は10台が曳き廻されているが、この整列略図を見ると、大正10年(1921)当時は、12町内の山車が描かれている。現在、山車を出していない上川岸町(本上川岸)、橋元町の2町内が当時山車を曳き廻していたことがわかる。ちなみに、図上の配列で9番目の上川岸町では神功皇后の大人形が、同じく11番目の橋元町では児島高德の人形が、それぞれ載せられていた。



「佐原町本宿八坂神社祭礼山車整列略図」(大正10年)

◆明治 42 年（1909）「佐原町諏訪神社大祭山車番組之図」

明治 42 年（1909）「佐原町諏訪神社大祭山車番組之図」には、14 台の山車が描かれているが、これは、現在の山車を運行する 14 町内の山車とは若干異なるものがある。一つは、現在休止中の中宿の山車が描かれていること、もう一つは東西の両関戸が関戸町として 1 台の山車を曳き廻していることである。旧関戸町は、明治 34 年（1901）にすでに分町されていたが、その後も歴史ある山車を共有で曳き廻していたが、昭和 9 年（1934）に些細な諍い事で分離し、以後は東、西それぞれで山車を曳き廻すことになった。ちなみに、この時の中宿は鍾馗の大人形載せていて、分離後の東関戸は大楠公、西関戸は瓊々杵尊の大人形を載せるようになった。なお、番組 13 番目の上宿町は、三蓋笠鉾が描かれているが、現在は源義経の大人形となっている。



「佐原町諏訪神社大祭山車番組之図」（明治 42 年）